

京都市内遺跡発掘調査概報

平成 9 年度

京 都 市 文 化 市 民 局

ごあいさつ

京都は、世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内には多くの遺跡があり、これらは埋蔵文化財包蔵地と呼ばれ、年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みをもつものが数多く存在します。

このような埋蔵文化財は、我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができます。国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって保存すべきものであります。

近年、埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は、これら埋蔵文化財保護に少なからず影響を及ぼしております。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は、その保存と開発行為との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があると考えております。

本報告書は、平成9年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書であります。この調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであります。

結びに、この度の各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様を初め、御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様に心から感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役立ていただければ幸いに存じます。

平成10年3月

京都市長 桧本 賴兼

例　　言

- 1 本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成9年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。
- 2 調査地は、下記のとおりである。
 - I 上ノ庄田瓦窯跡 北区西賀茂上庄田町16
 - II 横原廃寺跡第4次調査 西京区横原内垣外町14・15-1
 - III 中臣遺跡第26次調査 山科区勧修寺西栗栖野町139-1～7
- 3 本書の執筆分担は下記のとおりである。
 - I-1～4 南 孝雄
 - II-1～5 久世康博
 - III-1～4 平方幸雄 高 正龍
- 4 整理作業および本書の作成には、上記執筆者の他に以下のものが参加した。
網 伸也 出水みゆき、清藤玲子、中村寧子、能芝妙子、法邑真理子、村上 勉
- 5 写真撮影は遺構・遺物ともに村井伸也、幸明綾子が担当した。但し、中臣遺跡第27次調査の写真は牛嶋 茂（現奈良国立文化財研究所）が撮影した。
- 6 本書で使用した遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 本書で使用した土壤色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、辻純一、宮原建吾が行った。本書中で使用した方位及び座標の数値は、平面直角座標系Nによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 9 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画図（枚野・勧修寺 緩尺1/2,500、京都市その8 緩尺1/10,000）を複製して調整したものである。
- 10 本書の編集は南 孝雄が行った。

本文目次

I 上ノ庄田瓦窯跡

1 調査経過	1
2 遺 構	2
(1) 1号窯	2
(2) 3号窯	3
(3) その他の遺構	3
3 遺 物	4
(1) 瓦 類	4
(2) 土 器 類	8
4 ま と め	9

II 樅原廃寺跡第4次調査

1 調査経過	11
(1) 経 緯	11
(2) 既往の調査	11
2 第4次調査の遺構	12
3 第3次調査の概要	15
4 遺 物	17
(1) 瓦 類	17
(2) 土 器 類	20
(3) 金 属 器	21
5 ま と め	21

III 中臣遺跡第76次調査

1 調査経過	23
2 遺 構	23
(1) 方形周溝墓	23
(2) その他の遺構	27
3 遺 物	27
4 ま と め	29

図版目次

- 図版1 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 調査区遺構平面実測図
- 図版2 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 97年調査区遺構平面実測図
- 図版3 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 1号窯平面・立面実測図
- 図版4 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 3号窯平面・立面実測図
- 図版5 横原廃寺跡 遺構 遺構配置図
- 図版6 横原廃寺跡 遺構 遺構平面実測図
- 図版7 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 1 調査区全景（北東から）
2 1号窯全景（東から）
- 図版8 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 1 1号窯隔壁（南東から）
2 1号窯焚口（北西から）
3 1号窯焼成室（南東から）
- 図版9 上ノ庄田瓦窯跡 遺構 1 3号窯焼成室（南東から）
2 3号窯焼成室土層堆積状況（南西から）
- 図版10 上ノ庄田瓦窯跡 軒丸瓦・鶴尾
- 図版11 上ノ庄田瓦窯跡 軒平瓦
- 図版12 上ノ庄田瓦窯跡 瓦縫部
- 図版13 横原廃寺跡第4次調査 遺構 1 第1トレンチ全景（北から）
2 第2トレンチ全景（北から）
- 図版14 横原廃寺跡第4次調査 遺構 1 SB205検出状況（北東から）
2 SB205東辺（北から）
3 SB205西辺（東から）
- 図版15 横原廃寺跡第4次調査 遺構 1 SB205北辺（東から）
2 SK220（北西から）
3 SD212・216（北東から）
4 SK104（北西から）
- 図版16 横原廃寺跡第3次調査 遺構 1 1区全景（西から）
2 SC1（南西から）
3 SD48瓦堆積状況（東から）
- 図版17 横原廃寺跡第3次調査 遺構 1 2区全景（北から）
2 1区P26（南東から）
3 2区P205（北東から）
- 図版18 横原廃寺跡 軒丸・軒平瓦

図版19 横原廃寺跡 道具瓦

図版20 横原廃寺跡 土器

- 図版21 中臣遺跡第76次調査 遺構 1 1号方形周溝墓（南から）
2 同全景（第27次調査 1979年 北西から）
- 図版22 中臣遺跡第76次調査 遺構 1 2号方形周溝墓（南東から）
2 同 溝内埋葬部2断面（南西から）
3 同 土器5出土状態（北東から）
- 図版23 中臣遺跡第76次調査 遺構 1 2号方形周溝墓土器2出土状態（北東から）
2 土器2
3 2区全景（北西から）

挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 3号窯焼成室断面図	3
図3 SD1・39断面図	4
図4 軒丸瓦、軒平瓦拓影・実測図	5
図5 軒平瓦の技法の違い	6
図6 小型軒丸瓦、軒平瓦拓影・実測図	7
図7 1号窯出土土器実測図	8
図8 調査地位置図	11
図9 SB205平面図	13
図10 2・3・4トレンチ南壁断面図	14
図11 第3次・4次調査区トレンチ断面図	14
図12 SK220実測図	15
図13 P26実測図	16
図14 P205、SX300断面図	16
図15 軒丸瓦、軒平瓦拓影・実測図	18
図16 道具瓦拓影・実測図	19
図17 第3次調査出土土器、金属器実測図	20
図18 調査地位置図	23
図19 遺構平面図	24
図20 1号方形周溝墓実測図	25
図21 2・3号方形周溝墓実測図	26

図22 溝内埋葬部2実測図.....	26
図23 1・2号方形周溝墓出土土器実測図.....	28

表 目 次

表1 報告書抄録.....	31
---------------	----

I 上ノ庄田瓦窯跡

1 調査経過

上ノ庄田瓦窯跡は、西賀茂瓦窯跡群の最北に位置する。西賀茂瓦窯跡群は、上ノ庄田瓦窯跡から南へ1.5キロメートル程離れた角社町周辺やその中間の鎮守庵町などを中心に群在する。瓦窯は、舟山から東へ派生する丘陵の先端や賀茂川西岸の段丘に築かれている。瓦窯の多くは平安京遷都後まもなく平安宮への供給のために操業され、平安時代中期まで続く。

西賀茂瓦窯跡群の調査は、昭和8年の西田直二郎、梅原末治の調査に始まる。^{註1}昭和15年には木村捷三郎、井本正三郎、星野鶴二等によって上ノ庄田瓦窯跡の一部が調査されている。平安博物館が昭和45年から46年に行った角社瓦窯跡、醍醐の森瓦窯跡の調査では、西賀茂瓦窯跡群としては初めて瓦窯跡を群単位で捉えた調査が行われ、角社瓦窯跡では東群と西群に分かれて合計5基の窯が調査された。また出土した軒瓦から、吹田市岸部瓦窯から西賀茂瓦窯群、西賀茂瓦窯群から栗栖野瓦窯への瓦船の移動が確認された。^{註2}同じく昭和46年に京都市文化財保護課が、鎮守庵瓦窯跡の調査を行い3基の平窯が調査され、角社瓦窯跡と同瓦が出土している。^{註3}昭和54年の下水道工事に伴う立会調査では、角社瓦窯跡で新たに窯跡1基が確認され、鎮守庵瓦窯跡では土壤から多量の鶴尾片が出土している。^{註4}西賀茂瓦窯跡群は、栗栖野瓦窯跡と並んで平安京に瓦を供給した瓦窯群として重要な遺跡である。しかし、その多くは区画整理や宅地化によって現状が不明であったり、破壊されたものが多い。

今回の調査は、西賀茂第3土地区画整理事業に関連して行われたものである。調査は今回で3年目を迎える。平成7年は遺跡の範囲を確定するため試掘調査を行い、瓦窯数基と工房跡の存在が明かとなった。平成8年は工房跡部分の調査を行い、掘立柱建物2棟、ロクロピット、工房と窯を囲む排水溝を検出した。今年度は、窯本体の遺存状況を知る為の確認調査を行った。調査の結果、昭和15年に一部調査されていた1号窯、その北東に隣接する3号窯とともに良好な状態で遺存していることが判明した。なお、遺構の掘り下げは遺存状況を確認した段階で終えている。

調査には(財)京都市埋蔵文化財研究所調査第3係・網伸也、南孝雄があたり、7月15日から9月5日の約1.5箇月にわたって行った。



図1 調査地位置図 (1:5,000)

2 遺 構

上ノ庄田瓦窯跡は、標高110m前後の鴨川による低位段丘の台地の上に築かれている。遺跡は台地の上に工房跡が、その先端に窯が築かれている。台地は、南西から北西に向かってわずかに傾斜し、遺構は、0.3m程の耕土を取り除くと黄褐色土の地山面で検出される。今回検出された遺構は、瓦窯2基、瓦窯背後の排水溝1条、瓦溜1基、土壙2基である。以下、遺構ごとに概略を述べる。

(1) 1号窯(図版1~3・7・8)

昭和15年に木村捷三郎等によって燃焼室部分が調査された窯である。燃焼室の上半部は削られていたが、遺存状況は概ね良好であった。半地下式の平窯で、窯の全長2.8m、窯体は、内側に瓦を積み直す修復を2回は行っており、その結果、窯の規模は窯窓当初よりも小さくなっている。焼成室は、歿を検出した段階で調査を終了している。

焼成室 焼成室は長さ0.7m、幅1.8mを測る。側壁、奥壁ともに瓦と粘土を交互に積み上げ構築されている。仕上げに黒色の炭混りの泥土を塗り、その上をスサ入り粘土で覆っていたようであるがほとんど剥落している。奥壁は、検出面より0.2m下までを平瓦を小口積みとし、それより下は平瓦の側面を焼成室内側に見せ積んでいる。奥壁と南側壁のコーナー部は、奥壁側の平瓦と南側壁側の平瓦が交互に重ねながら積まれており、同時に構築されたものであることがわかる。一方、北側壁と奥壁の瓦は交互に重ねて積まれておらず、構築時期が異なる事をうかがわせる。つまり焼成室の修築は、南側壁・奥壁より北壁が1回多く修復されている事を示す。これは検出面において、奥壁の平瓦が北側壁の瓦よりも更に北に続いていること、南側壁の外側にも古い段階の側壁が1条、北側壁の外側にも古い段階の側壁が2条確認されていることからも理解できる。床面は検出していないが、5条の歿を持つ。歿は、平瓦と厚さ0.1mほどの粘土を交互に積み上げている。平瓦は、完形品の幅を3分の2、約16cmの大きさに打ち欠いて小さくしたものを使用している。

隔壁 隔壁は分焰柱とともに平瓦と粘土で構築され、この表面を全体に焼成室同様、炭混じりの泥土とスサ入り粘土で覆っていたようである。5本の分焰孔と6つ分焰柱からなり、分焰孔は焼成室の5条の歿と対応する。

燃焼室 燃焼室の長さは1.7m、幅は、隔壁付近で1.7m、焚口付近で0.9mを測る。側壁は、平瓦、鶴尾と粘土で構築されている。床面の縦断面は、焚口から0.8mまでが高低差0.1mほどの凹みとなり、ここから隔壁に向かって緩やかな登り勾配となっている。床面は、真赤に固く焼け縮まっている。また、燃焼室の側壁も焼成室同様、修築を行っており、北側の搅乱土壙の断面に古い段階の側壁が認められる。

焚口 花崗岩を鳥居型に組んでいる。内径で高さ約0.4m、幅0.55mを測る。天井石は、本来一つの石であったものが二つに割れている。焚口の中には瓦や石があるが、窯の内側から詰め込まれたようであり、昭和15年の調査当時、焚口の崩壊を防ぐために行われたものと考えられる。

焚口の外側は、家屋の下になるため調査は行っていない。

(2) 3号窯(図版1・2・4・9, 図2)

1号窯の北側に位置する。燃焼室部分は家屋の下になるため焼成室のみ調査を行った。焼成室の南半は近代の野臺により奥壁、側壁の一部が破壊されていたが、遺存状態は良好であり、歓の最上部を検出した。北半は、窯体の一部とみられる瓦積みが焼成室内に崩落した状態が検出された為、この状態で調査を終了している。

焼成室 焼成室は、横幅2.1m、奥行き1mを測る。南半のみを歓の最上部まで検出した。壁面は、上半部が近代の野臺によって壊されている。下半部は奥壁、南側壁ともに鷲尾片と粘土で構築され、平瓦は若干量使用されているのみである。平瓦のみで焼成室を構築していた1号窯とは異なる。また、壁面の仕上げも1号窯でみられた瓦積みとスサ入り粘土の間の炭混じりの泥土がなく、スサ入り粘土のみで内面の仕上げを行っている。歓の幅は約0.18mで1号窯よりやや幅が広い。南半で3条検出しており、全体で6条あるものと思われる。

隔壁 平瓦と粘土で構築されている。隔壁は垂直に立ち上がるが、歓上面より0.45mの所で斜めに焼成室内に向かって削られている。これは、焼き上がった瓦を天井部の一部を壊しながら取り出す際に隔壁の一部が削られた為と考えられる。

焼成室北半の堆積状況 焼成室の北半中央では、半裁された7~8枚の平瓦が粘土と交互に重なった状態で検出している。瓦の間の粘土は焼け締まっており、窯体の一部を構築していたものが焼成室内に崩落したものと考えられる。この瓦積みは、その向きから二つに分かれる。奥壁に小口を描える様に並んでいるものと、この前面に北側壁に対して小口を描えるものがあり、これは北側壁から焼成室中央に向かって延びる。なお、瓦積みと隔壁の間に廃棄された軒平瓦がある。

焼成室内の断面観察によれば、瓦積みの下には大きく3層の土の堆積がみられる。第1層は、瓦積みの下によく焼けたスサ入り粘土が約0.2m堆積する。瓦積みの土と同質であり、よく焼けていることから瓦列とセットとなって窯体を構築していたと思われる。第2層はほとんど遺物を含まない黄褐色の砂泥が0.1~0.4m堆積する。地山の黄褐色度と同質であり遺物を含まない。第3層は歓の直上で瓦と炭・焼土混りの砂泥が堆積している。炭や焼土が多く混ざることから焼成中もしくは直後の堆積土と思われる。第2層は、瓦窯廃窯後に雨水とともに窯体内に流入したものと思われ、廃窯後に若干の時間の経過の後に瓦列と第1層の崩落があったことを示している。

(3) その他の遺構

S D 38(図版1・2・7, 図3) 1号窯、3号窯の後方にある窯体への雨水の進入を防ぐ排水

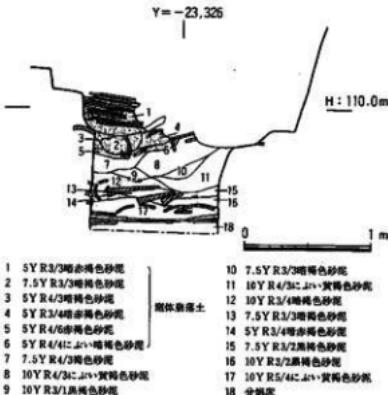


図2 3号窯焼成室断面図

溝である。幅2~4m。瓦の検出と断面観察のための断ち割りを行った段階で調査を終了している。溝は、1号窯後方で窯を囲むように直角に曲がり調査区外へと続く。北東で浅く南西側で深い。SD39は、断面観察によれば2時期に分かれる。溝全体は瓦をほとんど含まない、黄褐色土で埋没した後、溝の中央に幅1.8mの溝を掘り直している。この新段階のSD39の堆積は、瓦と焼土で一気に埋められており、雨水とともに流れ込む地山の黄褐色土はほとんどみられない。SD39は切り合い関係から昨年度の調査で検出したSD1より古い段階の排水溝であることが分かる。SD39の中に幅の狭い溝を掘削した後、程なくその背後にSD1を掘削し直したと思われる。平安時代の平窯の背後に掘られた排水溝として、吹田市岸部瓦窯跡や西賀茂角社西群瓦窯跡などがある。ともに多量の焼土と瓦で埋められており、特に岸部瓦窯跡の例は上ノ庄田と同様に溝の最終段階で溝を掘削し直している。

SK44 96年の調査では瓦を集中して検出したことから2号窯としていた遺構である。瓦が大量に廃棄されている。遺構は調査区外民家側に続き、完掘はしていない。

SK45 SK44に切られた土壌。深さ1.3m。埋土の中層には瓦を大量に含む。土壌の側面と底部には白色粘土が貼られている。熱変化をした痕跡はみられない。性格として窯、粘土溜、水溜などが考えられるがSK44同様、完掘しておらず詳細は不明。

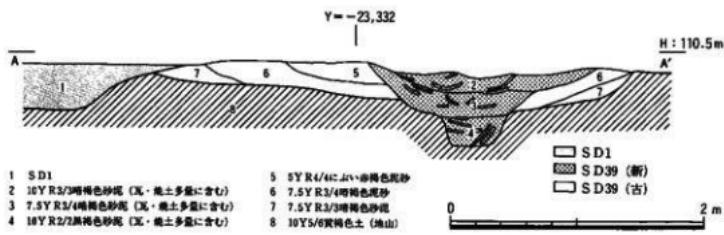


図3 SD1-39断面図

3 遺 物

出土した遺物はほとんどが瓦類である。出土量は350箱以上にのぼり、現在洗浄作業も終了していない。整理作業中であるが、軒瓦を中心に概略を述べておきたい。

(1) 瓦類(図版10~12、図4~6)

軒瓦は小片を含めると200点以上出土し、軒平瓦が8割を占め軒丸・小型軒瓦がそれぞれ1割であり、軒丸瓦2種、軒平瓦2種、小形軒丸瓦3種、小形軒平瓦2種がある。胎土は、2~3mmの白色粒・黒色粒を多く含み、中には5mm以上の礫もある。色調は、炭素が吸着し暗灰色を呈するものもあるが、橙褐色のものも多い。焼成は全体にやや軟質である。

軒丸瓦 1は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。このタイプの軒丸はほとんど出土せず3点のみである。瓦当裏面はナデ調整、側面は弱いヘラ削りを施す。焼成はやや軟質。SD39第1層出土。

2・3は、複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。このタイプが軒丸瓦の8割を占める。凸形中房で蓮

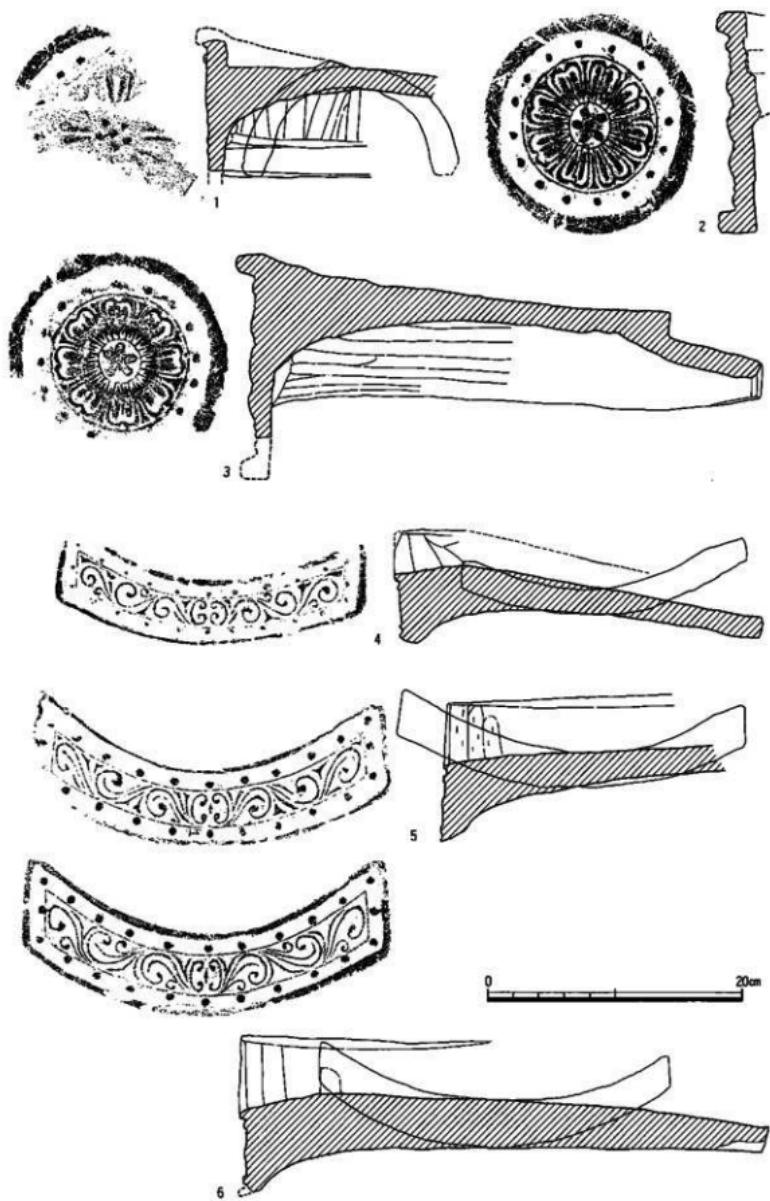


图4 軒丸瓦、軒平瓦拓影·实测图

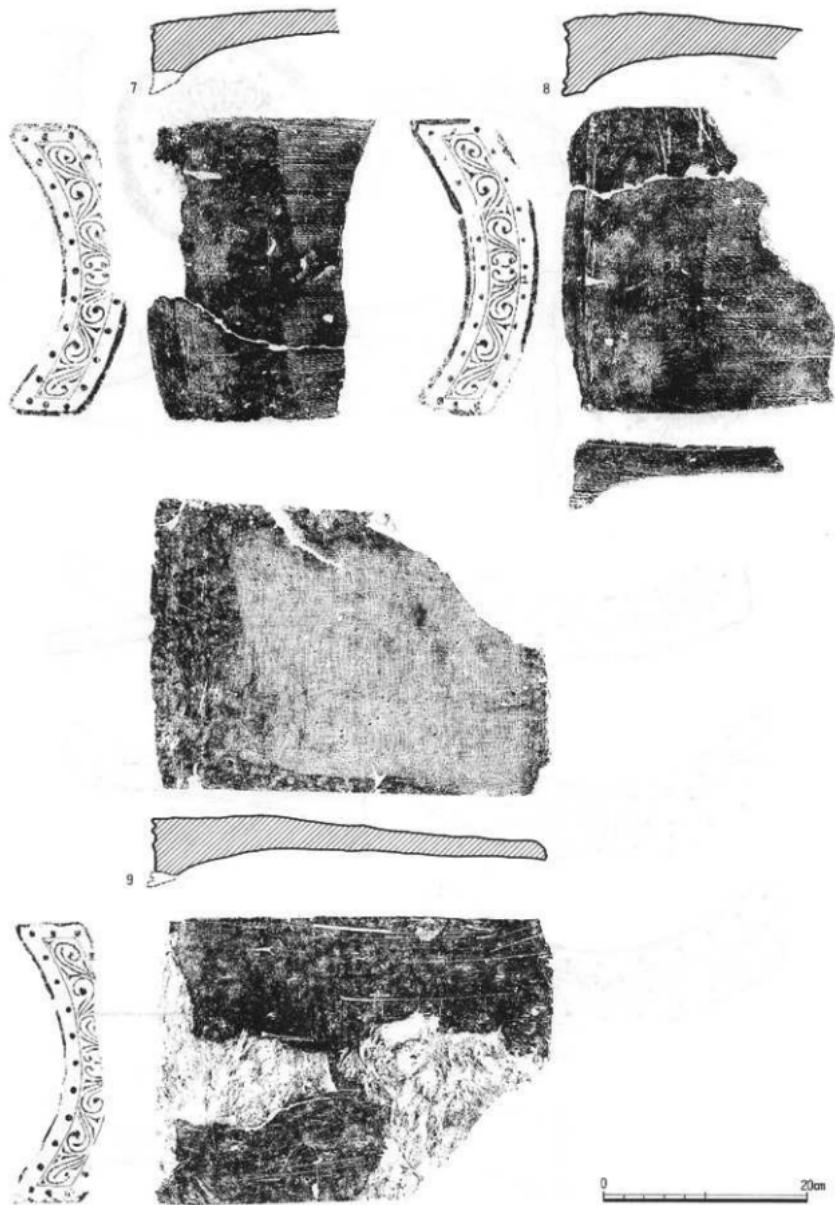


図5 軒平瓦の技法の違い

子は1+5。蓮弁は中央で盛り上がり、1葉ごとに間弁を配する。瓦当裏面は何れも平坦、3がナデ調整、2はヘラ状工具を用いてナデを施す。瓦当側面はいづれも弱いヘラ削りを施し、範型の痕跡を残す。成形方法は、接合式で、瓦当裏面上部に何らかの工具で丸瓦の厚さよりも浅く幅の広い溝を設け、補足粘土をもって接合する。2は、溝を設ける部分に、あらかじめ指によって弧を描いた溝が残っており、この部分は丸瓦先端が密着しない。丸瓦部は、凸面を全体に縦方向のヘラ削り、凹面は瓦当裏面から粘土を撫で付けるナデ調整、瓦当接合面はナデ。SK45出土。

軒平瓦 4はやや横幅の狭い均整唐草文軒平瓦。SD39第1層から1点のみ出土。中心葉は対向C字形。唐草は両側に3回反転し、各単位に第1、第2支葉がある。平瓦部凸面は縦方向ヘラ削り、一部に指頭圧痕あり。5は均整唐草文軒平瓦。このタイプが軒平瓦の8割を占める。対向C字形の中心葉の中に紡錘形の小葉を配し、両側の唐草は3回反転する。唐草の各単位の構成は、第1、2単位は第1枝葉が1葉で、第3単位が第1枝葉は2葉構成、第2支葉も存在する。下外区の「上」の鏡文字はある段階で厄型に追刻したもので、無いものもある。この文様の軒平瓦は調整、額部の形態などが幾つかに分かれため、後にまとめて述べる。

6は均整唐草文軒平瓦。このタイプの軒平瓦は少ない。小片を含めて180点以上ある軒平瓦の中で約2割である。中心葉は対向C字形を呈し、その中に紡錘形の小葉を配する。両側の唐草は3回反転する。唐草の第1、第2単位は、巻の強い主葉と2葉構成の第1支葉と主葉外側の第2支葉からなり、第3単位は、第1支葉が1葉構成で第2支葉を欠く。曲線額。平瓦部凸面は縦方向繩叩き後縦方向ヘラ削り、凹面は布目、瓦当面から8cm程を横方向ヘラ削り。額部は縦方向ヘラ削り、額面を横方向ヘラ削り。3号窯焼成室南半出土。

小型軒丸瓦・小型軒平瓦 10~12は小型軒丸瓦。10は単弁12葉蓮華文軒丸瓦。蓮子は1+5。瓦当裏面はナデ調整。SK45出土。11は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。蓮子は1+4。2弁ごとに間弁

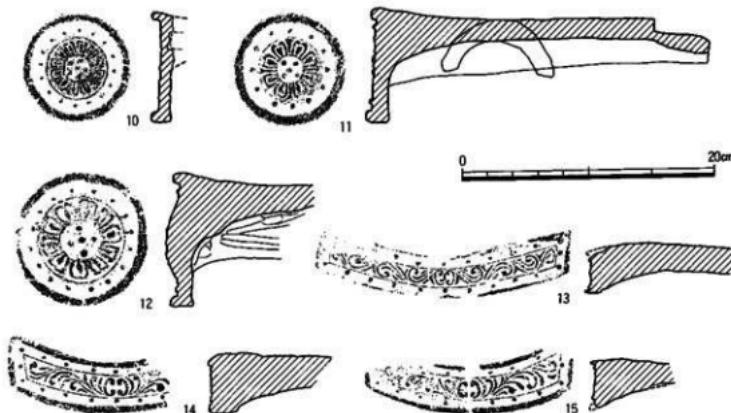


図6 小型軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図

を配する。瓦当裏面上部はナデ、下部を縦方向へラ削り。丸瓦部凸面を縦方向へラ削り。瓦当側面を横方向へラ削り。1号窯焼成室出土。12は単弁10葉蓮華文軒丸瓦。蓮子は1+4。圓線から中房に向かって全体がふくらむ。瓦当裏面上部はナデ、下部を横方向へラ削り。丸瓦部凸面は縦方向へラ削り。SD39第1層出土。

13~15は小型軒平瓦。13は均整唐草文軒平瓦。対向C字形の中心葉の中に紡錘形の小葉を置く。両側に展開する唐草は、中心葉の上側から派生し、4回反転する。平瓦部凸面はヘラ削り。1号窯焼成室出土。14・15は均整唐草文軒平瓦。対向C字形の中心葉から両側に展開する唐草は4単位に分かれるが、第2第3単位は反転しない。14の額部は縦方向へラ削り、額面は横方向へラ削り。平瓦部凸面は繩叩き。15は、額部は縦方向へラ削りで額面の幅は14に比べて狭い。平瓦部凸面は遺存部分では繩叩きはない。ともに3号窯焼成室出土。

¹³ 鳥尾 鳥尾はSD1から数点出土している。焼成はほとんどが須恵質、胎土は軒瓦よりも砂粒を多く含む。1は縦帶から錐部にかけての左側面。内郭の縦帶部は幅3.5cmの凸帯によって区画されるが、凸帯は剥離し、貼付のために施した三角形の刺突痕と平行叩きがみられる。内面はナデ調整で同心円叩きが残る。外郭は連珠文、珠文は貼付後に円筒により押さえつける、径4.2cm。錐部は外側が逆段型、内側が段型、削り出し成形。須恵質。2は縦帯頂部に近い左側面。内郭は逆段型、削り出し成形、平行叩き、同心円叩きが痕が一部に残る。焼成は軟質、白灰色。3は縦帶から錐部にかけての右側面。縦帶内郭は逆段型。

軒平瓦の製作技法 軒平瓦は、凹凸面に残った調整の痕跡と額面の形態から幾つかに分かれる。同范である5・7~9について現段階で気づいた限りで以下に述べる。5・9は、平瓦部凸面が縦方向へラ削り。9は平瓦部凹面の布目が狭端部から凸面先端に連続して残る。平瓦部凹面は瓦当近くを幅広く横方向へラ削り。額面の幅は約2cm。側面はタテ方向へラ削り、左側面には瓦当近くに布目痕が残る。この布目痕は、この他の瓦にもあり、中には凹面から連続するものもある。

7は、平瓦部凸面を繩叩き、瓦当面より約12cmまでは縦方向のヘラ削り。側面は縦方向のヘラ削り。額面の幅は約3.5cm。8は、平瓦部凸面を繩叩き後に縦方向へラ削り。瓦当面より約12cmまでは縦方向のヘラ削り。側面は繩叩き後に縦方向へラ削り。額面の幅は約2cmと狭い。軒平瓦の製作技法は、平瓦部凸面に繩叩きを施すものと凹面から連続する布で押さえる押圧技法によるもの分かれる。軒平瓦が押圧技法によるものか否かは平瓦部が狭端部まで残っていないと判断しにくい。しかし、凸面の繩叩きは瓦当面より12~15cmの所に残るもののがほとんどである。これよりも狭端部に近い部分で繩叩きが残っていないものを押圧技法による製作と考えると、今回出土した約200点の軒平瓦の内、約4割が押圧技法によるものである。

(2) 土器類(図7)

土器類はほとんどなく、1号窯焼成室の歓直上で出土した2点のみである。1は須恵器瓶子。口縁部は受け口

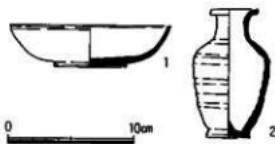


図7 1号窯出土土器実測図

状を呈し、頸部から肩部へかけては緩やかな曲線を描いて胴部へ至る。2は須恵器杯。縁粋素地の可能性もある。口縁端部は短く外反し沈線が入る。高台は削り出し。内外面、底部外面は細かい単位のヘラ磨き。平安京内ではあまり類例をみない特異な器形である。

4 まとめ

今回の調査によって上ノ庄田瓦窯跡は、瓦窯本体も良好な状態で遺存していることが判明した。1号窯は昭和15年に木村捷三郎等によって調査され、その後の民家増築などで焼成室の一部が削平されていたが、概ね良好な状態で遺存していた。焼成室は幅が1.8m、奥行きが0.7mと平安中期以前の瓦窯としては極端に小さい。これは少なくとも2度以上の修復の結果、最終的に小さくなつたものであり、築窯当初は今回調査したものよりも大きいものである。度重なる修復は窯体の損傷がその理由として考えられるが、その他に焼成時における窯体内の温度の一様化、温度調整の簡易さを目指したものとも考えられる。3号窯は焼成室のみの調査であったが、その北半で窯体が崩落した瓦積みを検出した。瓦積みの原位置は二つの可能性が考えられる。一つは西側の瓦積みが奥壁、北側の瓦積みが北側壁の可能性。しかし、平瓦を小口積みにした壁面が崩壊したとすれば、小口は床面に対して垂直となるか、または斜め方向になると予想されるが、この瓦は凹面を床面に向いている。2つめは、瓦積みは窯体内に垂直方向に落下したものと考え、天井部の一部が垂直に崩落した可能性である。この場合、北側の瓦積みが、北側壁から焼成室中央に向かって瓦が縦方向に並んで出土していることから、瓦を持送りで積んでいたと考えられる。一般的に平窯の焼成室の天井部は、瓦の窯詰め時と取り出し時に取り壊される為、薄く簡易なものが考えられている。今回は検出状態で調査を終えており、この瓦積みが天井部であったと断定することは出来ない。しかし、平窯の焼成室天井部も、ある程度の部分は恒久的に瓦と粘土で厚く構築されていた可能性も考慮すべきであろう。

瓦は、瓦当は図4-5の軒平瓦が圧倒的に多く、ある段階では専一的に生産していたのではないかと考えられる。上ノ庄田瓦窯産の瓦は、消費地に於いて出土例がほとんどなく、内裏、淳和院などから数例の出土例が知られるのみである。西賀茂瓦窯跡群の中では同瓦の出土例はなく、図4-2の軒丸瓦と図4-5の軒平瓦の同範が栗栖野瓦窯跡から出土している。^{註14}軒平瓦は、製作技法の点で繩叩きが主流を占める角社瓦窯跡に比べると、先に述べたように押圧技法によるものが多くを占めると考えられる。従来の研究によると、西賀茂瓦窯群から栗栖野瓦窯群へ生産が移行^{註15}する中で、官窯の軒平瓦の製作技法は凸面繩叩きから押圧技法へ移行するとされており、上ノ庄田瓦窯の操業時期や工人の編成を考える上でも重要な指摘である。このような西賀茂瓦窯跡群の中での相違が、上ノ庄田瓦窯の成立や操業時期などを考える上での問題点となり、今後の調査と整理を進める上での課題としたい。

註

- (1) 西田直二郎・梅原末治「栗栖野瓦窯址調査報告」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告15』 京都府 1934年

- (2) 当時の状況については星野歎二氏から御教示を得た。出土資料は以下に報告されている。
『木村捷三郎収集古瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (3) 「西賀茂瓦窯跡」平安京跡研究調査報告第4輯 (財)古代学協会 1978年
- (4) 吉本亮後他「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」「京都市埋蔵文化財年次報告 1971」京都市文化観光局文化財保護課 1972年
- (5) 百瀬正恒氏の御教示による。
- (6) 南 孝雄・前田義明「上ノ庄田瓦窯跡」「京都市埋蔵文化財調査概要 平成7年度」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (7) 南 孝雄・網 伸也「上ノ庄田瓦窯跡」「京都市埋蔵文化財調査概要 平成8年度」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- (8) 堀江門也「岸部瓦窯跡発掘調査概報」大阪府教育委員会 1968年
『吹田市史』第8巻 1981年
- (9) 近藤清一氏は、角社西群瓦窯の焼土壤を平窯への水を排除する機能があったとする。
近藤清一「第4章 官窯の変遷とその解体過程」「平安京古瓦図録」雄山閣 1980年
- (10) 吹田市博物館、藤原 学氏の御教示による。
- (11) 軒瓦の比率は昨年出土分でもほぼ同様である。
- (12) 「上」の文字の判読については山口大学橋本義則氏に御教示を得た。
- (13) 鶴尾の部分名称については以下の文献に従った。
『日本古代の鶴尾』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980年
- (14) 角社瓦窯跡出土の軒平瓦の一部にも側面の瓦当近くに布目压痕がみられるものがある。但し、確認した限りでは右側面に限られる。これらは軒平瓦を凸型台からはずす際に、台から余った布で瓦当近くを押さえながら行うためについた可能性が考えられる。京都府文化博物館権山茂氏の御厚意により遺物を実現した。
- (15) 昨年の調査で出土した土器を加えても、上ノ庄田瓦窯から出土した土器類は合計5点である。
- (16) 平窯の天井部の調査例として角社東群I・II号窯の燃焼室の天井部が一部遺存していた例がある。検出時で厚さ0.2m、瓦と粘土で構築されている。註(3)に同じ。
- (17) 内裏では図4-5と同范の軒平瓦が淳和院では図6-14と同范の小型軒平瓦が出土。
内裏出土例は註(9)に同じ。
吉川義彦「淳和院発掘調査報告」関西遺跡調査会 1997年
- (18) 吉村正親「栗栖野瓦窯跡の調査(その1)」「栗栖野瓦窯跡発掘調査概報」京都市文化観光局 1992年
註(2)に同じ。
- (19) 上原真人「前期の瓦」「平安京提要」角川書店 1994年

II 横原廃寺跡第4次調査

1 調査経過

(1) 經緯

横原廃寺は1967年に発見された、白鳳時代に建立されたとされる寺院の一つである。横原廃寺は京都洛西にある長岡丘陵の東北端の台地上に位置している。三方に山が開けており、特に東側は、はるか京都の街を見下ろしている。現状の地形は、調査地の西側に西山丘陵の山麓が控え、東へ向かっての傾斜が認められる。

今回の調査に先立って、調査地の北方で宅地開発に伴う事前調査（第3次調査）を行なったところ、北回廊と考えられる遺構が検出された。この回廊状遺構と第1次調査で確認された南面

回廊の距離が100余mとなり、南北に長大な伽藍が推定されるに至った。

その結果を受けて、第4次調査は、寺域の規模や伽藍配置を明らかにすることを目的として国庫補助により行なったものである。なお、参考資料として第3次調査の概要も併せて報告する。

(2) 既往の調査

第1次調査(1967年) 市営住宅の建設に伴い発掘調査が実施された。八角形の瓦積基壇の塔跡（一辺約5.07m、対辺の距離12.27m）を中心に、南側に中門（東西20m、南北11m）と考えられる基壇跡を検出し、また南回廊（幅約5m）及びこれに取り付く東西両築地壇（幅2.4m）の痕跡が確認された。

なお、塔跡の基壇中央には、地表から約2mの地下に心柱の礎石（一辺約2m、花崗岩製）が据えられており、円形の柱型を彫りこぼめたこの心礎の形式と、出土軒丸瓦や瓦積基壇の存在から、7世紀中葉に造られた寺跡と推定された。さらに出土瓦から、この寺の終焉は平安時代前期と考えられている。遺構の検出状況と現状の地形から、中門・塔・講堂・金堂などが一直線上に並ぶ四天王寺式の伽藍配置が考えられた。1971年（昭和46）に国の史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されている。

第2次調査(1981年) この調査は、東築地と推定される地点での調査である。調査の結果、横原廃寺で使用された瓦片が多く出土したが、すべて中世以後の遺構からの出土である。1次調査の東築地とその西側の畠部分はかなりの段差があるため、削平を受けたものと考えられる。



図8 調査地位置図 (1:20,000)

立会調査(1987年) 調査範囲は広域にわたっており、伽藍に直接関連する遺構は検出されなかった。しかし推定寺域の西方の山裾で、瓦窯跡が発見された（樅原廃寺西瓦窯）。瓦窯本体の検出はなかつたが、灰原を確認している。

試掘調査(1995～96年) 1995年は、推定寺域内の北半の試掘調査を行い、1996年には、東築地推定地において試掘調査を実施した。ともに中世以後の遺構を検出するに留まっている。

第3次調査(1997年) 調査の結果、回廊跡、掘立柱建物、溝などを検出した。その概要については後述する。

2 第4次調査の遺構

第4次の調査地の現況は畑作地で、東西約40m、南北約40mがその範囲である。調査地内には、塔跡の北側20m付近に若干の高まりがあり、從来金堂跡と推定されていた。調査に当たって、幅1.2～2.2m、長さ約35mの南北トレンチを2箇所に設定し、東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチとした。第1トレンチは金堂や講堂に取り付いたり開む、回廊（築地）の存在を明らかにする為に調査区の東半に設定した。第2トレンチでは先に述べた高まりを中心として、金堂・講堂が検出される事を目的として設定した。また、遺構の検出状況に応じて拡張することとした。

基本層位(図版8、図10・11) 調査地の基本土層は、第1トレンチでは現耕作土の下層に、江戸時代の遺物を包含するにぶい黄褐色砂泥層（0.2～0.4m）があり、この下層が地山の褐色砂泥層の遺構面となる。また、1トレンチの南端では、寺院造営時の整地層である黄褐色砂泥層を厚さ0.3～0.7mで確認している。地山の褐色砂泥層は南東に向かって落ちていることも確認している。遺構面の標高は、2トレンチで36.0m、3トレンチでは35.6mと東へ低く傾斜している。また、3次調査2区での遺構面は、35.7mであり2トレンチとは0.3mの比高差が存在する。

S B205(図版14・15、図9・10) 塔跡の北方約20mほど離れた低い高まりの下で発見した基壇である。土壌状の高まりは以前から金堂基壇と推定されていたものである。検出した基壇の規模は、東西14.3m、南北10m以上、高さ0.85mである。基壇上面および基壇外周は後世の削平を受けており、礎石の据えつけ痕跡や抜き取り痕跡、それに基壇外装などは明かでない。基壇北辺部では、耕作土・中世の遺物包含層を除去すると瓦堆積層が認められた。瓦を一部取り外すと、長軸0.2から0.3m、短軸0.1から0.15mの自然石を東西に並べた石列を1条検出した。また、基壇北西部では石の抜き取り跡を確認している。しかしながら、基壇東辺および西辺では、後世に掘られた溝などによって削平を受けており一切みられなかった。しかしながら、基壇上に後世に掘られた擾乱土壌などの断面観察から、基壇は砂泥層と砂を突き固めている事がわかる。ただし、掘込地業を行っているかどうかはについては確認していない。基壇の外回りには幅0.6から1.0mの素振り溝を検出している。

S K220(図版15、図12) S B205の北側20mに位置する。一辺0.8mの方形土壙。深さは0.1mと遺存状況は悪い。土壙内より軒丸瓦、平瓦が出土。時期は不明であるが、9世紀の土器が出土するSK221に切られている。

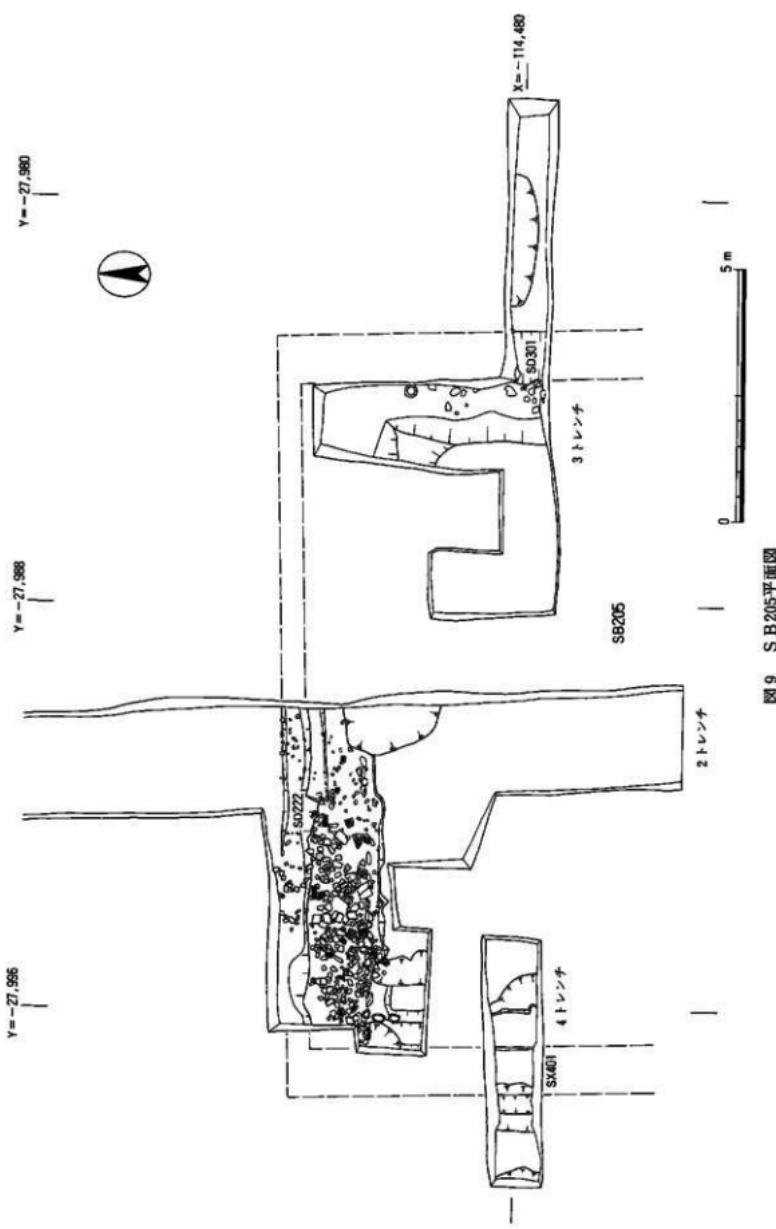


図9 S B205平面図

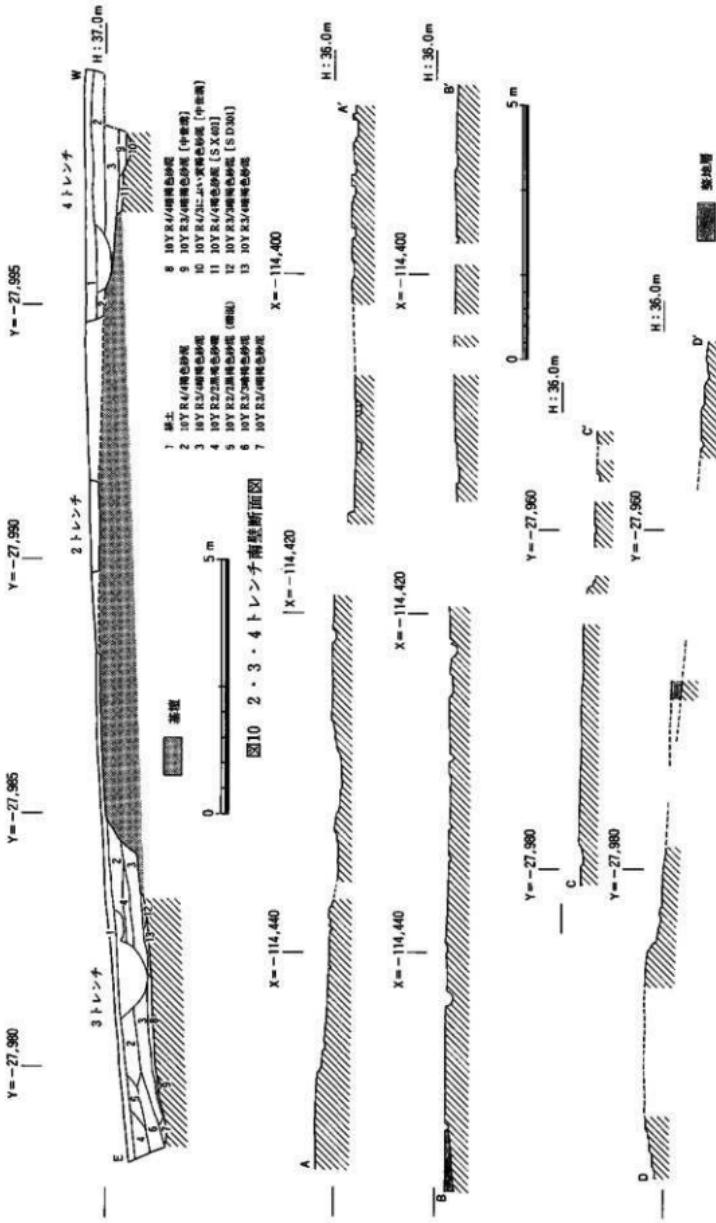


図11 第3次・4次調査区トレンチ断面図

SK104 1トレンチで検出した土壌。径1.0m、深さ1.1mを測る。壙底には、 0.1×0.2 mの石を平坦面を上に向けて据えたような状態で検出している。

SK219 径1.1m、深さ0.2mを測る、埋土は炭のみであった。時期は不明。

SK211B 2トレンチ中央で検出した瓦溜造構。径2.6mを測る。多量の瓦とともに中世の土器が出土。

SD110 1トレンチ北端付近で検出する東西方向の溝である。幅1.4m、深さ0.4mを測り、埋土からの出土遺物はない。

SD212、216、217 第2トレンチで検出した自然流路。3条の溝として検出したが、全体で一つの流路となり、幅6.5m、深さ0.8mを測る。南西から北東にかけての流れの方向を示している。大きく4時期の流れを断面の観察から判断できる。遺物は瓦類と中世の土器が出土。

SE112 2トレンチで検出した中世の井戸。深さ1.6m、一辺約1.5mを測り方形を呈する。井戸枠などの痕跡はなく、素掘りの井戸と考えられる。この付近では中世の井戸を集中して確認している。

3 第3次調査の概要

第3次調査では、主要伽藍域の北限を画する回廊や、その内側で掘建柱建物が検出されるなど、櫻原廃寺の様相を考える上で重要な調査となった。先に述べたように、この成果が第4次調査の契機となり、以下にその概要を述べる。

基本層位 調査地の基本土層は上から、現代盛土、にぶい黄褐色泥砂層、褐色泥砂層（遺物包含層）、黄褐色砂泥層（造構面）となる。造構面の標高は1区中央で34.8m。南北にはほぼ水平であったが、東西には1区と3区とでは約0.8mの高低差がある。

SC1 主要伽藍域の北限を画する掘立柱の回廊。調査では11間ほどを検出した。柱間寸法は、桁行2.1から2.7m、梁行が2.4mを測る。南北両雨落ち溝の心々距離が5.34mである。この寸法は第1次調査の南回廊と同規模である。SD49（北雨落溝）は、幅0.7m、深さ0.1mを測る素掘り溝である。この溝の一部で下層では溝（SD49A）が存在し、掘り直しの可能性がある。SD48（南雨落溝）は、幅1.6m、深さ0.1mを測る素掘り溝。東側は調査区外へと続く。溝内には多量の瓦が堆積していた。SD48に切られて古い溝（SD49B）が検出されており、掘り直しが行われている。

SD207 2・4・6区で検出した南北溝。幅0.9から1.2m、深さ0.3mを測る。溝からの出土遺物はなく、時期は確定しがたい。第1次調査で検出された東築地雨落溝の延長線上にあたる。

S D 66 1区南西部で検出した幅0.4~1.0m、深さ0.3mを測る南北溝。溝は北端で西へ折れ曲がり急に浅くなり、その延長は不明確。遺構の切り合いから9世紀以前の溝とわかる。

S D 180 S C 1中央部で検出された東西溝。幅0.3~0.9m、深さ0.1~0.2mを測る。溝は東へ行くにしたがい細く浅くなり、調査区中央付近で途切れる。溝内から平安時代前期の土器が出土しており、S C 1廃絶後の主要伽藍北限を画する溝と考えられる。

S B 1 衍行5間、梁行2間の東西方向の掘立柱建物である。柱掘形は一辺0.6~0.8mの隅丸方形で、柱間寸法は、梁行、衍行とも2.3mを測る。

S B 2 衍行4間、梁2間の掘立柱建物である。柱掘形は一辺0.7~0.8mの隅丸方形で、柱間寸法は、梁行、衍行とも2.3mを測る。

S B 3 梁行4間、衍行2間の掘立柱建物である。柱掘形は一辺0.8~1mの隅丸方形で、柱間寸法は、梁行、衍行とも1.8mを測る。

S B 4 衍行3間、梁行1間分を確認。南廂建物。柱間寸法は2.4mを測る。柱掘形は0.3m。S D 49の埋土を切って成立しており、寺院廃絶後の建物の可能性がある。

P 28(図13) 建物3の南側の土壤。径0.4m、深さ0.15mを測る。土壤内からは軒丸・軒平瓦が出土。

S K 30 S D 48の上面で検出した土壤。径0.85mを測る。土壤内より8世紀後半の土器が出土。

S K 83 1区北東で検出した土壤。径0.8m、深さ0.25mを測る。土壤内には炭が厚く堆積する。遺物の出土が少なく時期は特定しがたいが、寺院には関連しない平安時代以降の土壤と考えられる。

S K 182 1区南端で検出した。径1.2m、深さ0.25mを測る。埋土は焼土が多く、平安時代の土師器皿が出土している。

この他、2区においてS D 48、207、近世の溝に切られる形で性格不明の土壤・S X 300(図14)を確認。東西4m、南北2.8m以上、深さ0.6mを測る。細かい単位で土の堆積が認められる。

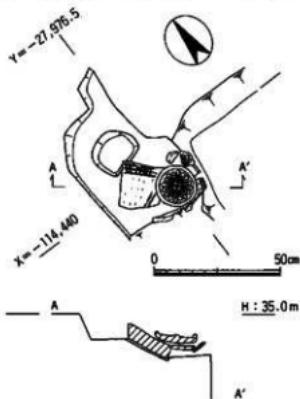


図13 P 26実測図

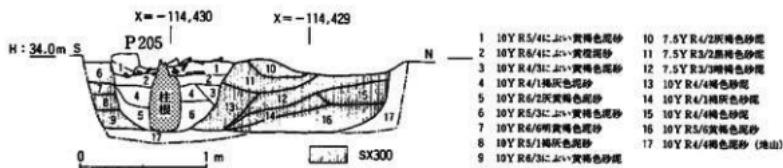


図14 P 205、S X 300断面図

4 遺 物

ここでは、3次、4次調査で出土した遺物についてまとめて述べる。3次調査で出土した遺物は整理箱で106箱、4次調査で出土した遺物は36箱である。出土した遺物のほとんどは瓦類であった。現在、整理途中であるが以下にその概要を記す。

(1) 瓦類(図15、16)

瓦類は、大半が丸・平瓦で、軒丸瓦、軒平瓦、鬼板のほか道具瓦が数点出土している。時代は白鳳から平安時代に至る。4次調査での傾向としては平瓦が多く、丸瓦が少ないという点が上げられる。

軒丸瓦は4種出土している。1は重弁8葉蓮華文軒丸瓦。凸型中房で蓮子は1+4、この外側に輪状文が巡る。反り返った蓮弁は細身で高く盛り上がり、子葉は肉厚に2重に表す。間弁は鋭く三角形を呈し、中房まで延びる。周縁は幅広の直立縁。接合式で瓦当裏面を強くなでついている。4次調査で検出した中世の井戸から出土。2と3は同範の軒丸瓦である。1と同文意匠をもつが、蓮子は連なって放射状になっている。2は、端部凸面を削った丸瓦を接合する。丸瓦凸面には荒い刷毛目痕跡が明瞭に残る。瓦当裏面下端をなでつけるのは1と同じであるがやや弱い。なお、文様面には中央部分を先に範めし、後に周辺部を埋めた痕跡が残る。3も2と同じ接合方によるが、瓦当裏面下端のナデではなく、青海波文の当て具痕跡が残る。文様面には自然釉が多く付着しており、周縁端部には瓦筋の端を示す粘土のバリが一部観察できる。同範瓦が北白川庵寺塔跡から出土している。2は3次調査のSD48から、3は4次調査のSB205の上面から出土。4は複弁8葉蓮華文軒丸瓦。文様は平坦で、文様面と直立縁の高さが同じである。瓦当側面及び裏面から丸瓦部にかけてはナデ調整で丁寧に仕上げられている。3次調査の近世溝から出土。5は摩滅が激しいため文様が不明であるが、塔跡の調査で出土した細弁14葉軒丸瓦の可能性がある。4次調査の遺物包含層から出土。

軒平瓦は3種出土している。6、7は素文軒平瓦である。6は直線額で格子叩きを凸面に残す。7は段額で2状の沈線を配す。ともに桶巻き作りで6には粘土板接合痕、7には分割回線を残すが、側面は削り調整によって分割線を消している。6は3次調査のSK211から出土。7は3次調査のSC1の柱穴から出土。8は直線額の三重弧文軒平瓦。磨滅が激しく、調整は不明だが側面上面を面取りしている。3次調査SC1の柱穴から出土。9は均整唐草文軒平瓦で、乙訓周辺から多く出土する平城宮6721系の軒平瓦である。額は曲線額で縱方向のヘラ削りと考えられる。磨滅が激しく他の調整は不明。3次調査SB2北側柱から出土。

鬼板は1点出土している。10は粘土紐で作り出した輪宝状の文様を並べて構成する。下部にはヘラでエグリを入れた痕跡が僅かながら確認できる。裏面に斜格子叩きが施されている。3次調査SD48から出土している。

道具瓦が2点出土している。何れも破片で全体はわからないが、丸瓦と平瓦を組み合わせたような形を呈している。11は凸面布目、凹面をナデで仕上げている。12は凸面に布目、凹面は細か

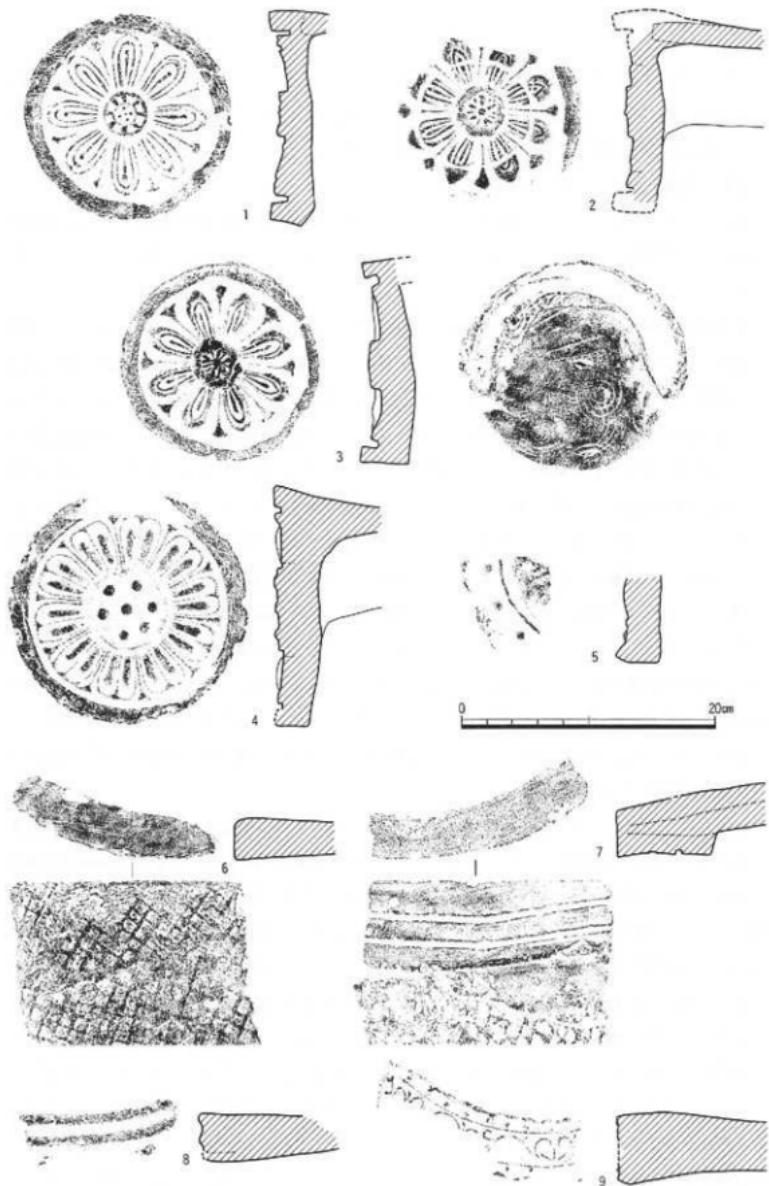


图15 轩丸瓦、轩平瓦拓影・实测图

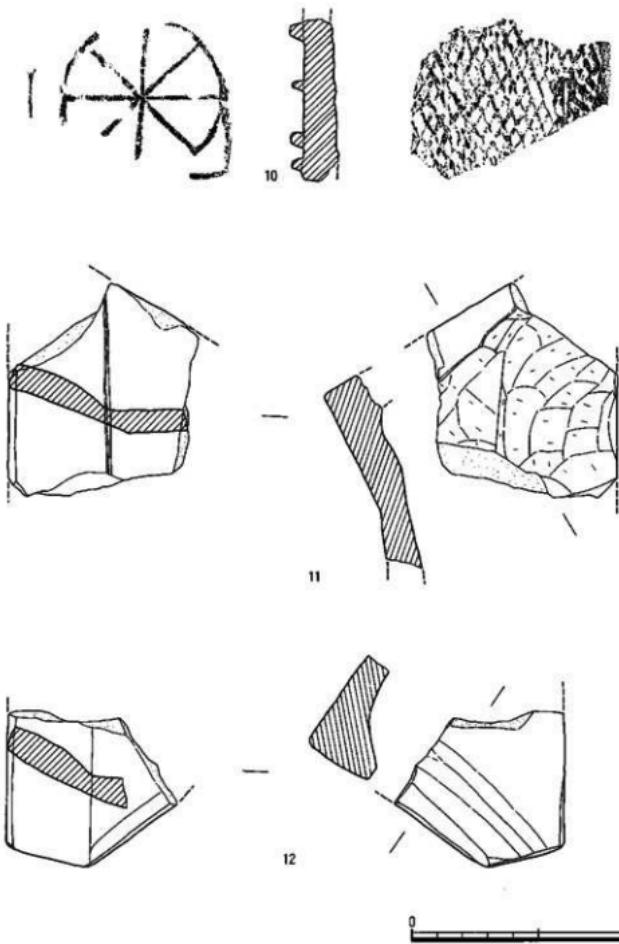


図16 遺具瓦拓影・実測図

い単位のヘラ削り調整をしている。側面は11が2面、13が3面残っているが、いずれもヘラ削り。また、13-1つの側面が凸面で肥厚し断面は瓢状を呈する。これは12にも存在した痕跡が認められる。11は3次調査のSD49から出土、12は3次調査SD48から出土。この瓦は、平面形が通常の瓦と大きく異なることが特徴である。八角形の塔に葺く道具瓦の一つである可能性があり、その場合、屋根の隅部に葺く軒平瓦あるいは隅蓋瓦とも考えられる。今後の遺物整理が進んだ段階でさらに接合される事もあり、この瓦の具体的な用途は今後の課題としたい。

(2) 土器類(図17)

土器類は土師器、須恵器、二彩陶器、瓦器、中世陶器などがある。4次調査出土の土器は、多くが小破片で図示出来るものがなく、以下に3次調査で出土したものについて造形ごとに述べる。時期的には大きく2時期に分かれ、SD48、160、SK30が8世紀後半から9世紀前半の様相を呈し、この他、11世紀から12世紀の土器がまとめてみられる。

SD180 12は須恵器杯蓋。口縁部の屈曲は小さく、器高は低い。

SD48 8、9は須恵器杯A。ともに体部外面回転ナデ、底部を弱い回転を加えたヘラ状工具によるナデ調整。13は環状把手が付く須恵器蓋。外面天井部は比較的丁寧なヘラ削りより平滑に仕上げる。19、20は鉄鉢形土器。19は20に比べて底部が丸みを帯びる。外面調整は回転ヘラ削り、凹凸はほとんどない。

SK30 10は須恵器杯B。14から16は須恵器壺。14は球形を呈する体部から口頸部は低く立ち

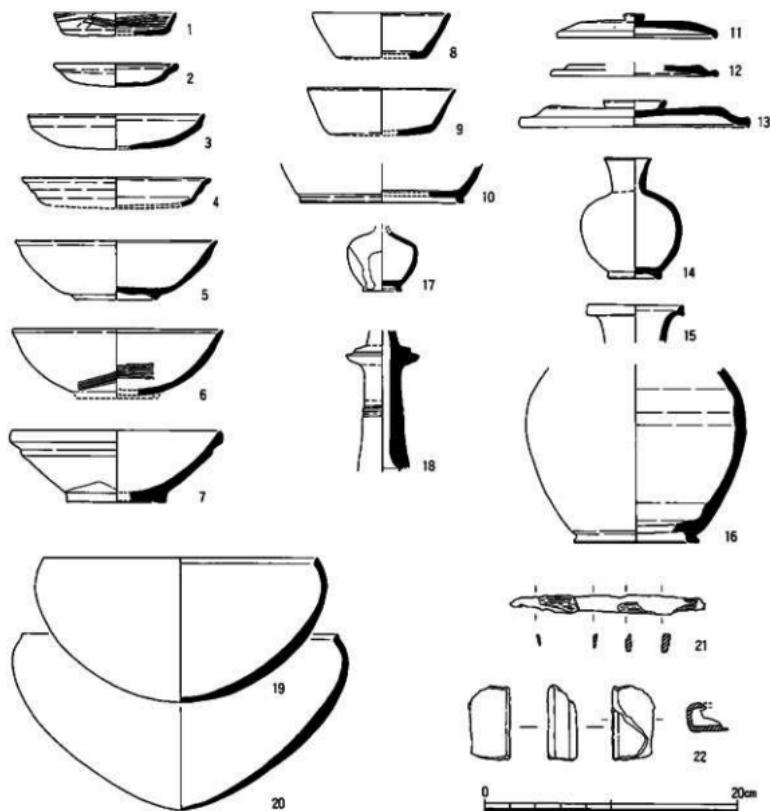


図17 第3次調査出土土器、金属器実測図

上がる。口縁部は小さく外反し丸く收まる。外面は全体にヘラ状工具により丁寧になでられている。

P 5 1は瓦器皿。外面体部及び底部の一部と内面の全体にヘラ磨きを施す。5は瓦器椀。体部はやや開き気味で口縁部は弱く外反する。高台は断面三角形を呈する。

土器はこの他に包含層や溝などから、2から4の土師器皿。6の黒色土器椀B類、7の白磁碗、11の須恵器蓋、17の灰釉小壺、18の淨瓶などが出土している。

(3) 金属器(図17)

21は鉄製刀子。長さ15.4cm、最大幅1.5cm、最大厚0.6cmを測る。このうち刀身長は12.5cm(厚0.15cm)かと推定できる。柄の部分は腐蝕して無いが、刀身部には所々に鞘と思われる木片が残存している。一部に漆状の膜が認められる。3次調査1区整地層から出土する。

22は断面コの字形の鉄製品。長辺5.9cm、短辺3.3cm、厚さ0.4cmを測る。表面には鉄錆のはかに緑青様の錆が付着しているのが認められる。3次調査SB1の柱穴より出土。

5 まとめ

ここでは、4次調査の成果を中心に3次調査の成果を合わせて述べる。

4次調査の結果、從来金堂跡と推定されていた低い高まりの下からは小規模な建物基壇SB205が検出され、この東側ではSB205に取り付く回廊などは確認されなかった。

検出されたSB205は塔との距離が近接しており、中門から北をみた場合この基壇建物は、小規模な為完全に塔の背後に隠れてしまう。SB205(東西14.3m)は東西3間程度の建物しか想定することができない。寺院跡でのSB205と同規模基壇の検出例として、滋賀県崇福寺跡の小金堂、穴太廃寺の創建期の金堂などがある。穴太廃寺の金堂は東西12.3m、南北14.2mと確認されている。また、SB205の上面は削られており、建物の上部構造の復原は困難である。但し、周辺から出土する瓦は平瓦が多く、軒丸瓦や軒平瓦、丸瓦はほとんどみられない。このことから建物の屋根は、瓦葺きでなく檜皮葺きで、瓦は棟に使用されたものと考えられる。また、基壇北辺部の石列を地覆石、その外側の溝を雨落溝と考えた場合、基壇上部の建物を復原する上で重要な点と思われるが、今後の課題としたい。

3次調査では回廊SC1、東築地に関連すると思われるSD207、また、これらの内側から掘立柱建物3棟を確認した。SC1は、南面回廊と対となって主要伽藍域北限を画していたもので、南北の距離は111mとなる。東・西両築地間の距離は66mであり、これらに囲まれた主要伽藍域は南北に細長いブランが復原される。東築地の雨落溝SD207の付近では、柱根の残るビットが検出されている。これらのビットがある時期の区画施設を構成するものか、または東築地付近に掘立柱建物が存在したのかは今回の調査では確認されなかった。SC1南側の掘立柱建物は、寺院に関連するものであるが、その時期を含めて具体的な性格は明かでない。回廊の南雨落溝(SD48)とこの上面で検出したSK30から出土した土器は、ともに8世紀後半から末の様相を示しており、この時期には北回廊(SC1)は廃絶していた可能性が高い。

参考文献

- 佐藤興治「櫻原庵寺発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概要」 京都府教育委員会 1967
杉山信三・佐藤興治「櫻原庵寺跡の発掘調査」「仏教藝術」66 毎日新聞社 1967
平尾政幸「櫻原庵寺発掘調査概要」 京都市埋蔵文化財調査センター 1981
長戸満男「櫻原庵寺・櫻原遺跡・櫻原庵寺瓦窯跡」「昭和62年度 京都市埋蔵文化財発掘調査概要」
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991
林 博通「穴太庵寺－急ぎ再建された寺－」「古代寺院の移建と再建を考える」 帝塚山考古学研究所
1995
梶川敏夫「櫻原庵寺跡」「京都市内遺跡試掘調査概要」 京都市文化市民局 1997
本郷真紹「古代寺院の機能」「日本国家の史的特質」 古代・中世 思文閣出版 1997

III 中臣遺跡第76次調査

1 調査経過

山科区勧修寺西栗栖野町139-1~7に住宅建設に伴う宅地造成が計画され、京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を行った。試掘調査を行った一帯は中臣遺跡西部の一画にあたり、これまでの調査成果などから弥生時代中期および古墳時代後期の墓域や奈良時代の集落に含まれることが知られていた。試掘調査の結果は、当初の予測通り、対象地の北側で方形周溝墓（1号）とそれに供獻された壺形土器1個体分を、南側で土壟状落込みなどの遺構を検出した。この結果を受けて、京都市埋蔵文化財調査センターは、発掘調査が必要である旨の指導を原因者に対して行なった。

本調査は、中臣遺跡第76次調査にあたる。調査区は、試掘調査で遺構を確認した北側（1区）と南側（2区）の2箇所に設定し、平成9年5月26日から調査に着手した。調査の手順は、表土層を重機（バックホー）を用いて排除し、その後は人力により遺構等の掘り下げを行った。また、調査の進展とともに2号方形周溝墓の南西側では別の周溝墓（3号）と重複していることがわかり、時期・規模などを確認するため一部拡張した。その間、必要に応じて図面・写真撮影などの記録を作成し、6月11日に埋め戻しを行い、12日にフェンス等の施設を撤去し、終了した。

2 遺構

調査地は、畠地として利用されていた表土層を除去すると、地表下0.06~0.54mで無遺物層となり、遺構は、全てこの無遺物層の上面で検出した。遺構には方形周溝墓3基、土壙4基、柱穴状のピット2基などがある。方形周溝墓は、全て1区で検出し、東から1・2・3号方形周溝墓とした。また、長年にわたる畠地利用等により遺構の上部はかなり削平されたとみられ、方形周溝墓の盛土はまったく遺存していなかった。なお、1号方形周溝墓については、27次調査で検出したものの西半に該当するぬ、27次調査の成果とあわせて報告する。

（1）方形周溝墓

1号方形周溝墓（図版21、図20） 2号周溝墓の北東側周溝と本周溝墓の南西側周溝とは重複し、前者の周溝が埋没した後に構築している。平面形は、南側隅がやや外側に張り出しいびつな方形で、北側隅で周溝が途切れ陸橋状となる。主軸方位はほぼN33°Eである。規模は、周溝の内法



図18 調査位置図 (1:5,000)

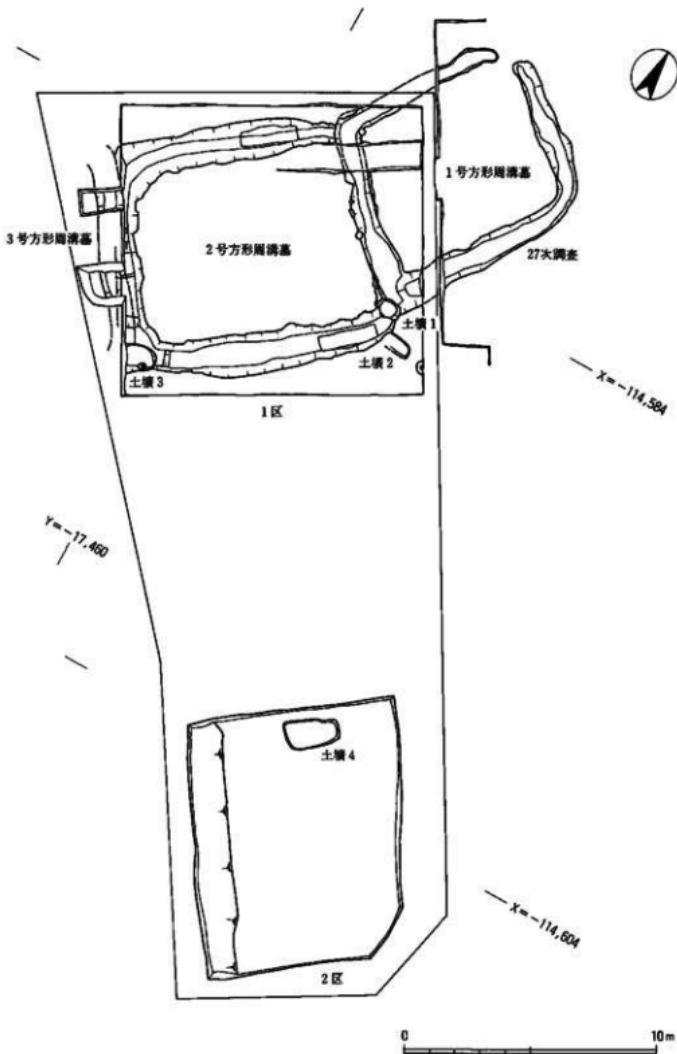


図19 遺構平面図

で北東—南西間で約7m、北西—南東間で約6.1m、周溝の幅0.6~1.2mある。検出面から溝底まで0.23~0.75mあり、南東側周溝の南隅付近はさらに0.2~0.35mと一段深くなっている。供獻されたと考えられる壺形土器1個体分(図23-1)が西隅付近で、破片となって一括で出土した。なお、この土器の大半は、試掘時に出土し、これと同一個体の口縁部片が約2m離れた北西

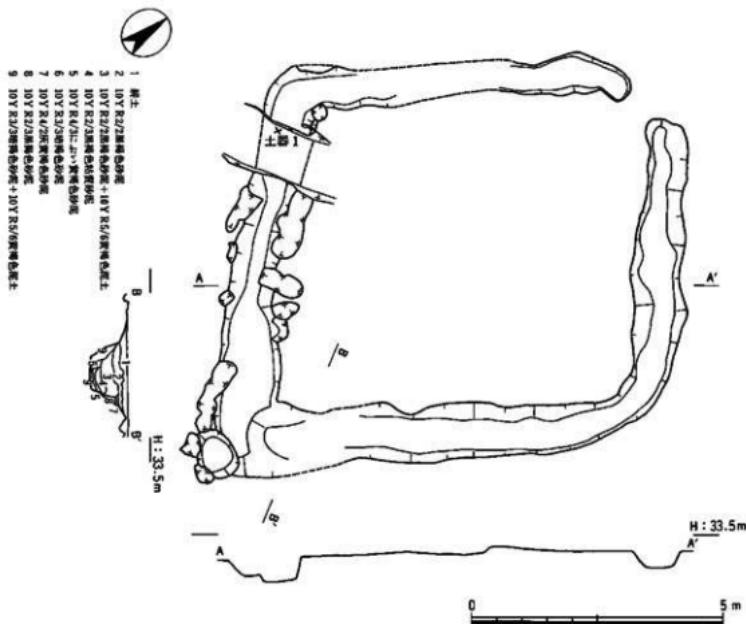


図20 1号方形周溝墓実測図

側の周溝内から本調査時に出土した。第27次調査では小片のみが出土し、明確に供獻されたとみられる土器は出土していない。

周溝墓全体がかなり削平されており、主体部は、墳丘に相当する部分では検出していない。ただし、明確な施設を伴っていないので断定できないが、溝が一段深くなる南東側周溝の南隅付近に土壤墓状の周溝内埋葬部があった可能性がある。

2号方形周溝墓(図版22・23、図21) 1・3号周溝墓と重複し、本周溝墓が最も早く構築されている。平面形は、北西辺がやや短い台形状で、周溝は全周する。主軸方位はほぼN52°Eである。規模は、周溝の内法で北東—南西間約8.6m、北西—南東間約6.8m、周溝の幅は0.9~1.7mあり、検出面から溝底まで0.53~1.02mある。なお、南隅の溝底は近接する溝底より0.15m高くなっている。供獻土器は、北西側の周溝から4個体が出土し、全て壺形土器であった。これらは溝底から0.08~0.65mの高さで完形(図23-2)、破片(図23-3~5)の状態で出土した。

周溝墓全体がかなり削平されており、主体部は、墳丘に相当する部分では検出していないが、北西側周溝内で埋葬部1を、南東側周溝内で埋葬部2を検出した。いずれも、溝がある程度埋まった後に土壤状に掘り込み、溝底に粘性の強い土を入れ、その上面が平らになるようにしている。

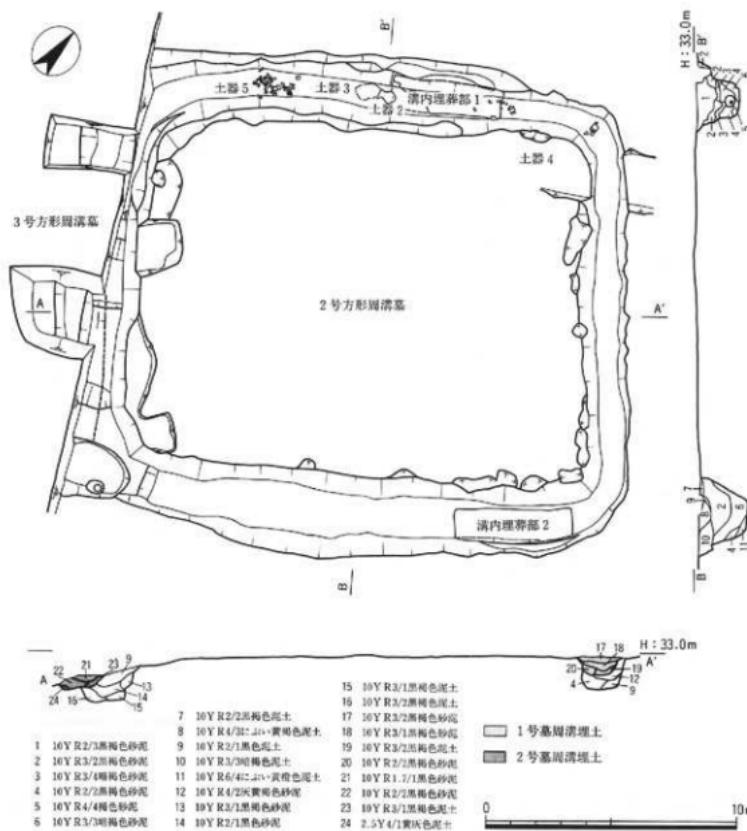


図21 2・3号方形周溝墓実測図

入土の平面形が長方形である点からみて、木棺を置くための床用入土と考えられるが、この上面では木棺の痕跡は認められなかった。墓壙上面の輪郭は平面では検出できなかったが、断面の観察では入土の両端と墓壙擾形の立ち上がりの輪郭とはほぼ一致する。埋葬部1の入土の範囲は、最大検出長2.2m、最大幅0.76m、同様に埋葬部2は最大長2.37m、最大幅0.7mある。

3号方形周溝墓(図版22、図21) 北東側の周溝を拡張区で一部検出した。2号周溝墓の南西側周溝と本周溝墓の北東側周溝とは重複し、2号周溝墓の周溝が埋没した後に構築している。溝幅は約1mあり、検出面

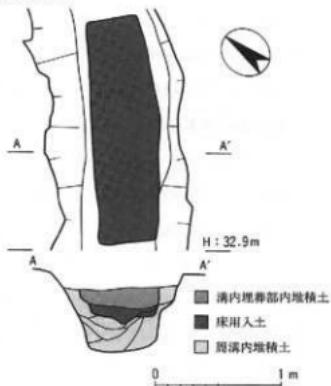


図22 溝内埋葬部2実測図

からの深さ0.21~0.33mある。溝心の方位はN 7° Eを示す。本周溝墓の大半は、対象地と隣接する南側の未調査地へと延びる。遺物は、周溝内の堆積土から變形土器の口縁部片が一片出土したのみである。

(2) その他の遺構

土壙1~3は1区で、土壙4は2区で検出した。土壙1は1・2号方形周溝墓と重複し、これらを掘り込んでいる。平面形は長楕円形で、長軸1.14m、短軸0.76m、検出面からの深さ0.45mある。遺物はサヌカイトのフレークが1片のみ出土した。土壙2は、2号方形周溝墓の東隅と重複する。平面形は長方形で、長軸1.1m以上、短軸0.6m、検出面からの深さ0.14mある。遺物は、平安時代以降の土師器皿の微片が出土した。土壙3は2号方形周溝墓の南隅と重複し、それを掘り込む。平面形は楕円形であるとみられるが、調査区外へさらに延長する。長軸1.3m以上、短軸1.07m、検出面からの深さ0.47mある。遺物は出土していない。土壙4は、2区北西端付近で検出した。平面形はいびつな長方形で、長軸2.28m、短軸1.0m、検出面からの深さ0.07~0.1mある。遺物は、7世紀代の土師器甕（体部片）が出土した。その他に、柱穴状のピット、近世以降の耕作に伴う段差状の窪みなどを検出しているが、柱穴状ピットについてはそれぞれが調査区の端で単独にあり、建物を構成する柱穴であるかは、判断ができなかった。

3 遺 物（図版22、図23）

今回の調査で出土した遺物には縄文土器、弥生土器、古墳時代以降の土師器、桃山時代以降の陶器などがある。縄文土器は、体部が条痕により調整される後期の特徴をもつ深鉢で、2号周溝墓の周溝内から出土した。古墳時代以降の土師器は、細片のみであり時期を限定し難いが、7世紀代の特徴を示す甕（体部片）と平安時代以降の皿などがある。また、桃山時代以降の陶器には椀などがあり、すべて近世以降の耕作に関連する土層から出土した。ここでは、方形周溝墓に供獻された弥生土器について述べる。

1は、頸部が外傾気味に長く立ち上がり、口縁部は角度を変えて大きく開く。最大径は体部下半にあり、胴部は丸みを帯びる。底部付近は欠落し、出土していないが、底部に向かって角度を変えてすぼまる形態になるとみられる。外面および口縁部内面はハケメ調整する。文様は、頸部の下方から最大径付近にかけての外面に、10条／単位とする備描直線文5単位を右から左へと巡らす。口径19.2cm。2は、頸部上半から口縁部にかけて大きく外傾し、最大径は胴部の中位にある。外面と口縁部内面はハケメ調整し、最大径付近よりやや下半はさらに縱方向でヘラミガキを加える。文様は、口縁部の外端面にヘラによる刻目を巡らし、頸部の中位から胴部上半にかけての外面に、7条／単位とする備描直線文7単位と、直線文最下帯の下部に同一原体による扇形文19単位を巡らす。焼成後に底部から約4.5cmの高さの箇所に穿孔を1箇所穿っている。なお、底部外面には、 2.1×2.3 cm角の格子目条の圧痕が連結した状態で認められる。口径20.0cm、器高34.8cm。3は、口縁端部を丸くおさめ、短く直立気味に外傾する頸部と体部下半が最大径以下で角度を変えてすぼまる形態からなる。体部外面は擦痕状の痕跡が残るナデ調整し、口縁部内外面をヨ

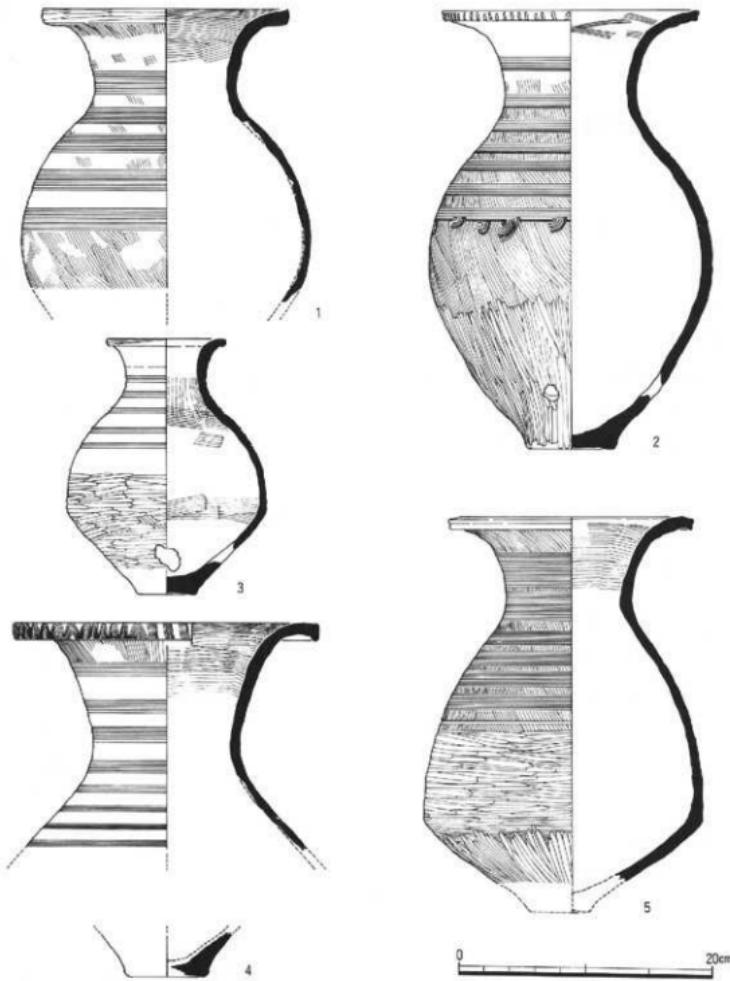


図23 1・2号方形周溝墓出土土器実測図

コナデする。また、最大径付近から底部付近にかけては横方向にヘラミガキを加える。内面は、最大径付近と肩部付近にハケメを施し、頸部には成形時のシボリメが顯著に残る。文様は、頸部下方から胴部上半にかけて3条／単位とする描绘直線文5単位を左から右へと巡らす。焼成後に底部から約3cmの高さの箇所に穿孔を1箇所穿っている。口径9.4cm、器高20.3cm。4は、頸部が外傾しながら立ち上がり、口縁部が水平に大きく開く形態をもち、口縁端部をやや下方へ拡張する。肩部付近から底部付近にかけての部位を欠く。外面と口頸部内面はハケメ調整し、外面の

文様帶部分をナデにより仕上げている。文様は、口縁部外端面と体部では異なる。前者の文様は、口縁部を4分割する位置に8条／単位とする原体を用いて縦方向の直線文3単位を施し、文様の区画帯とする。その区画帯間を同一原体による横描波状文で飾る。後者の文様は、頸部上半以下には同一原体による横描直線文を上から4単位、それ以下は6条／単位とする横描直線文4単位以上を巡らす。なお、直線文下に間隔をあけて波状文が1条施された同一個体とみられる細片があり、文様帶の最下帯は波状文とみられる。ただし、径を復原できないので、この細片が胴部のどの位置に相当するのか判然としないため、図には示していない。口径23.8cm。5は、外傾する頸部と水平に開く口縁部からなる。また、最大径が胴部下半にあり、それ以下は角度を変えて急激にすばむ形態となる。なお、底部を欠く。外面および口縁部内面をハケメ調整し、口縁部はヨコナデする。また、文様帶最下帯付近以下から最大径にかけては横方向に、以下は縦方向にヘラミガキを加える。頸部中位から胴部上半にかけて10条／単位とする横描直線文8～9単位を、さらに最下部には沈線を1条巡らして文様帶の最下段とする。なお、頸部には密に直線文が施され、肩部に移行する部位では直線文は2～3単位が重複している。口径19.2cm。

4 まとめ

今回の調査では、弥生時代中期前葉の方形周溝墓3基が主要な遺構であった。周辺では古墳時代後期の古墳（1次調査）、あるいは奈良時代の建物（44次調査）などが調査されている。当初は、調査地にこれらと関連する遺構が存在していると想定していたが、性格を特定できない土壙4基と柱穴状ピット2基を検出したのみであった。また、柱穴状ピットも単独で存在して調査区内では建物としてのまとまりは認められなかった。そのため、ここでは方形周溝墓と墓域などの概略についてふれ、まとめとする。

方形周溝墓 1～3号周溝墓が築造された時期は、溝内から出土した土器からみて弥生時代中期前葉（畿内第II様式併行）に位置し、これを前半と後半に2分すれば、後半に位置する。さらに、2号周溝墓から出土した土器を比較すると、やや古相を呈する2・3と新相を呈する4・5があり、後者が周溝内埋葬の行われた時期に相当するとみられる。また、1号周溝墓から出土した1と4・5の土器はほとんど時期差は認められないことから、1号周溝墓は2号周溝墓で周溝内埋葬が行われた後、あまり時間的経過をみるとなく築造されたと考えられる。3号周溝墓は、壺形土器の小片が出土したのみであり、今回得られた資料からでは1号周溝墓との時間的先後については、結論を出すことができず、今後の課題としたい。次に、周溝墓の盛土などは後世に削平を受けており、そのため墳丘に相当する部分で主体部は検出できなかったが、2号周溝墓では周溝内埋葬部を2箇所で確認した。これは、中臣遺跡では初例となる。また、方形周溝墓の大きさは墳丘に相当する部分の一辺が6.1～8.6mであり、中臣遺跡でこれまでにその全体が確認されている同時期の方形周溝墓と比較すると、あまり大差はない。なお、2号周溝墓から完形で出土した2の壺形土器は、底部から6.5～22.5cmの高さを境にして上方が著しく風化している。墳丘に供獻された状態を考える上で示唆に富む資料である。

墓域など 調査地付近では、これまで弥生時代中期の方形周溝墓が1次調査で1基、27次調査で2基検出されている。このうち、27次調査で検出した1基は、今回調査した1号周溝墓の東半部に相当する。1次調査地は、今回の調査地の北西約60mに位置し、それよりさらに西方約20mの44次調査では、土壙墓などを検出している。また、1次調査では壺棺墓も1基検出している。調査地より西側では、以上のように中期の墓域を構成する諸遺構を確認しているが、東側では既往の調査ではまったく検出、確認していない。以上から、今回の調査地が中期の墓域のほぼ東端に相当するとみられる。一方、墓域の南方への広がりを考える上で、3号周溝墓が重要な手がかりとなる。この周溝墓は調査地の南側にその主体があること、また、今回調査した方形周溝墓群のあり方は、連続した状態で逐次築造されていることからみて、墓域は3号周溝墓よりもさらに南方に広がって形成されている可能性が強い。次に、この墓域を対象になされた調査は、わずかな回数と面積であり多少の誤謬が生じるかもしれないが、墓域が形成された時期についてみる。1次、44次調査では墓域を構成する遺構から中期前葉でも前半の土器⁴⁴が出土しているが、付近ではこれまで前期の土器はまったく出土していないので、この頃に墓域の形成が始まったとみられる。想像をたくましくすれば、1・44次調査地付近で墓域の形成が始まり、今回検出した方形周溝墓群とは明らかに時期差が認められことから、順次東側へ拡大したとみられなくもない。しかし、墓域の範囲、存続期間、あるいはその内容は未だ不明といわざるを得ない。

註

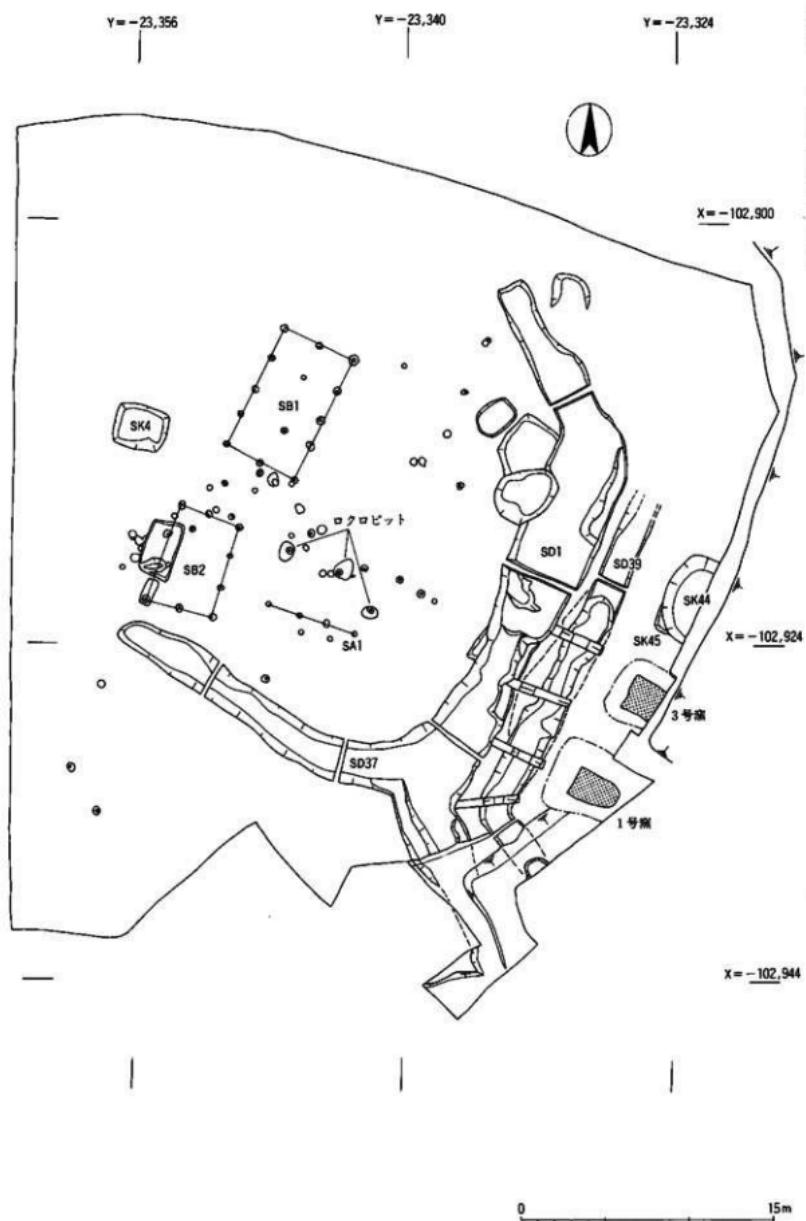
- (1) 当研究所で1979年に調査を実施。未報告。
- (2) 「A中臣遺跡発掘調査報告」 京都府立洛東高等学校郷土研究クラブ 1971年(譜写版)
- (3) 「『Ⅷ 44次調査』『中臣遺跡発掘調査概要 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- (4) 「中臣遺跡 1979年度」昭和54年度山科川中小河川改修事業に伴う発掘調査の概要 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- (5) 第1次調査から出土した一群の土器は、佐原氏によって山城における第II様式の古段階と評価されている。
佐原 真「1971年の考古学会の動向 弥生時代(下)」『考古学ジャーナル』No74 1972年

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはくつちょうきがいほう							
書名	京都市内遺跡発掘調査概報 平成9年度							
開番名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	久住康博・高正龍・平方幸雄・南孝雄							
編集機関	鶴京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本郷寺町488 TEL075-222-3108							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上ノ庄田瓦窯跡	京都府京都市北区西貴茂上庄田町16	26100		35度4分19秒	135度44分39秒	1996/7/6~9/5	365	遺跡の範囲確認調査
聖観音寺跡 第4次	京都府京都市西京区聖観院内坂外町14-15-1	26100		34度58分3秒	135度41分36秒	1996/8/14~9/12	173	遺跡の範囲確認調査
中臣道跡 第76次	京都府京都市山科区勤修寺西東宿野町139-1~7	26100		34度58分0秒	135度48分34秒	1996/5/26~6/12	230	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上ノ庄田瓦窯跡	窯跡	平安前期	平窯	瓦類		前期の瓦窯の構造が判明		
聖観音寺跡 第4次	寺院跡	奈良時代	建物基壇	瓦類		基壇の規模が判明		
中臣道跡 第76次	集落跡	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器		中期の墓域東半部が確定		

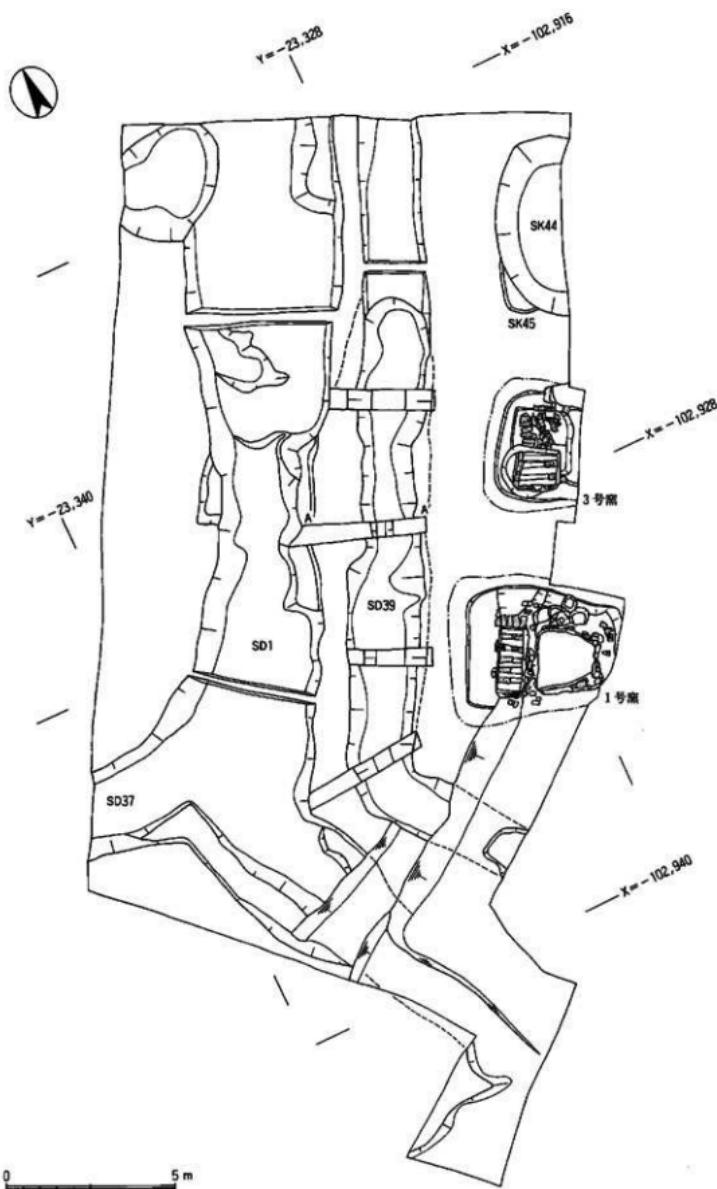
図 版

図版一 上ノ庄田瓦窯跡・遺構

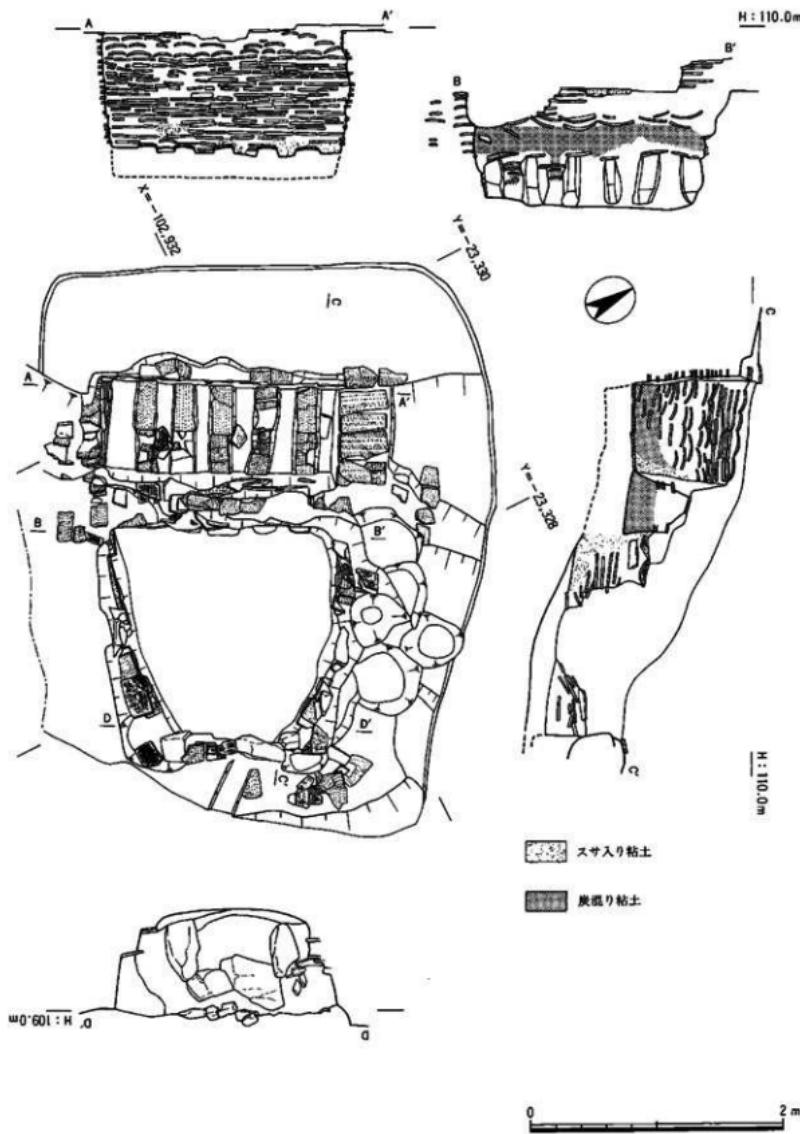


調査区遺構平面実測図

図版二 上ノ庄田瓦窯跡 遺構

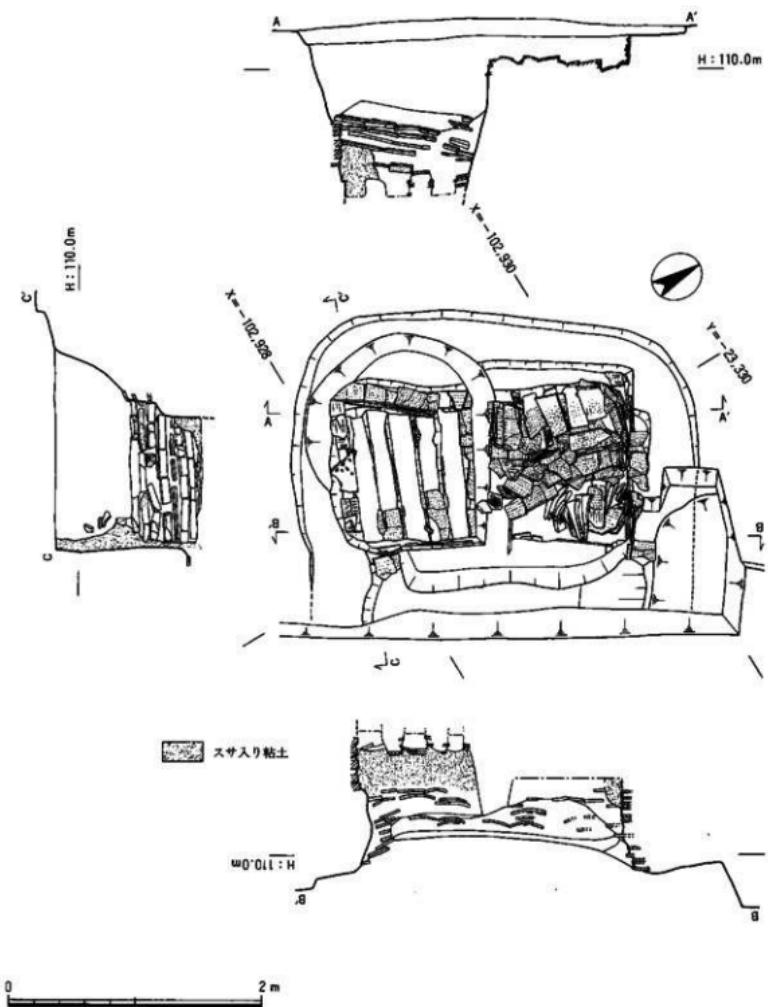


97年調査区遺構平面実測図

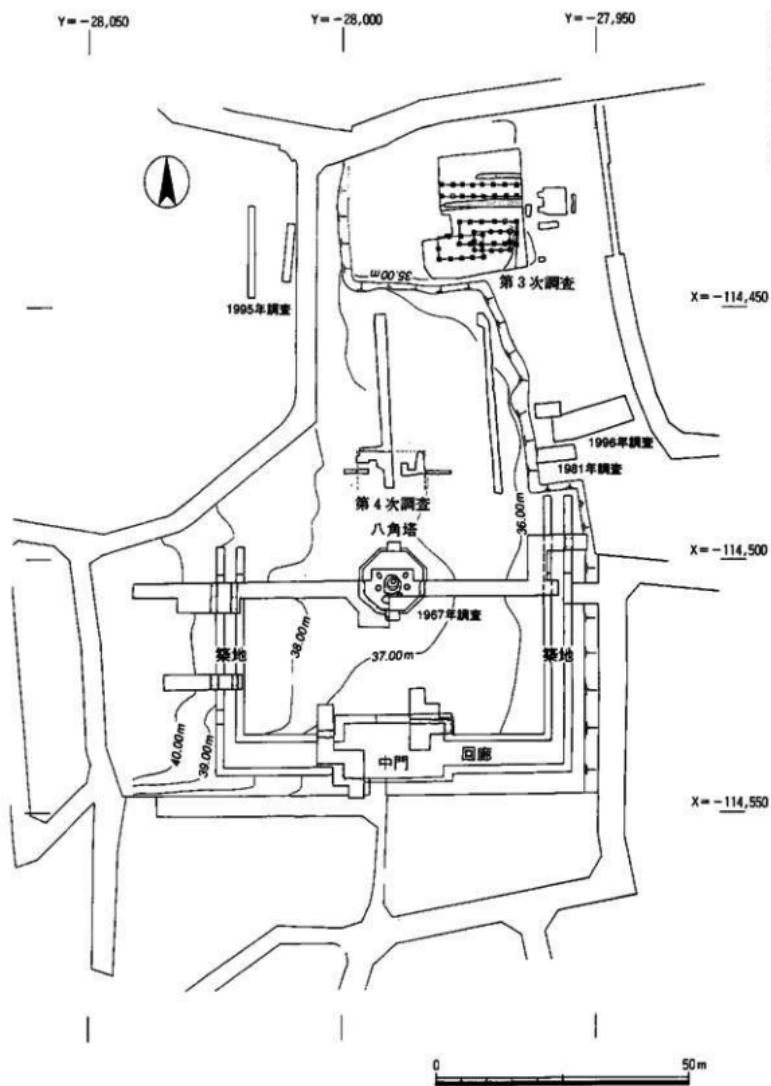


1号窯平面・立面実測図

図版四 上ノ庄田瓦窯跡 遺構

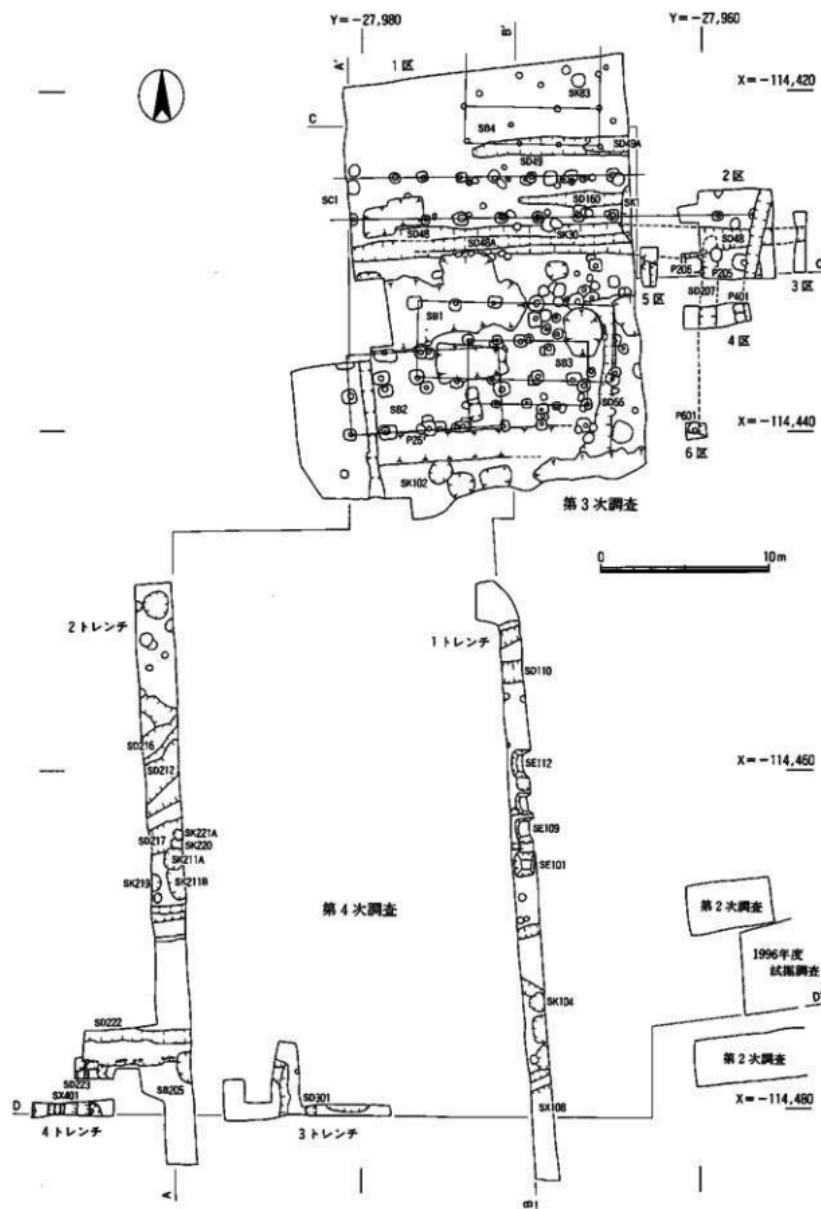


3号窯平面・立面実測図



遺構配置図

図版六 桜原廃寺跡 遺構





1 調査区全景（北東から）



2 1号窯全景（東から）



1 1号窯隔壁（南東から）



2 1号窯焚口（北西から）



3 1号窯焼成室（南東から）



1 3号窯成室（南東から）



2 3号窯成室土層堆積状況（南西から）

圖版一〇 上ノ庄田瓦窯跡
軒丸瓦・鷗尾



17

18

15



13



4

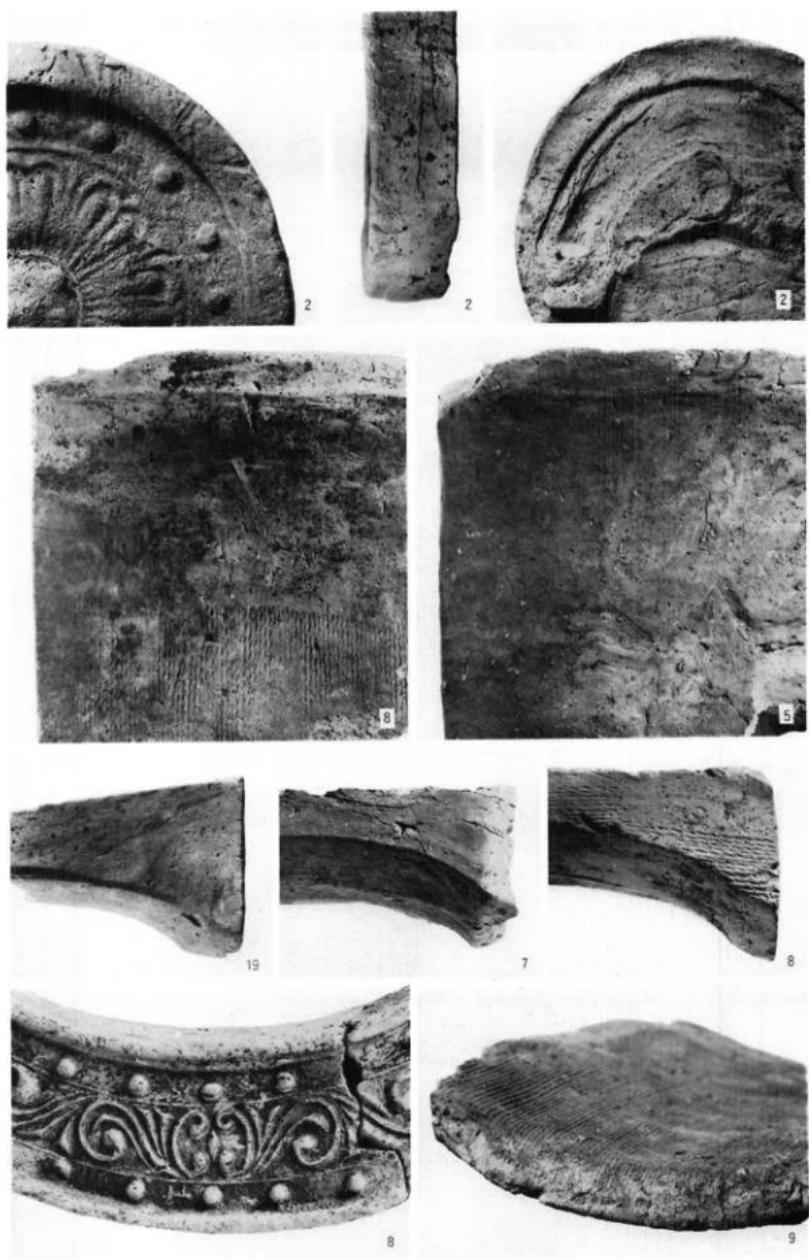


8



6







1 第1トレンチ全景（北から）



2 第2トレンチ全景（北から）



1 S B205検出状況（北東から）



2 S B205東辺（北から）



3 S B205西辺（東から）





1 S B205北辺（東から）



2 S K220（北西から）



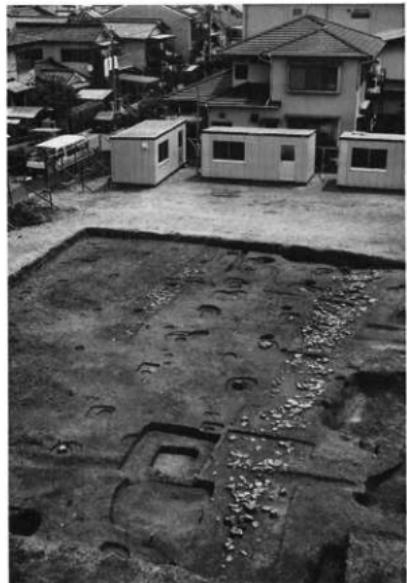
3 S D212・216（北東から）



4 S K104（北西から）



1 1区全景(西から)



2 S C 1(山西から)



3 SD48瓦堆積状況(東から)



1 2区全景（北から）



2 1区P26（南東から）



3 2区P205断面（北東から）

圖版一八 桜原廃寺跡 軒丸・軒平瓦

3



4



6

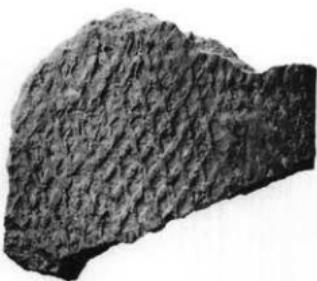


8



9

7



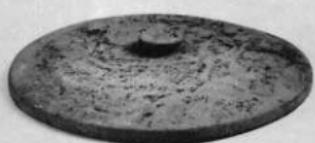
10



11



12



13



11



8



1



9



6



20



17



14



2



7



1 1号方形周溝墓全景（南から）



2 同 全景（第27次調査 1979年 北西から）



1 2号方形周溝墓全景（南東から）



2 同 溝内埋葬部2断面（南西から）



3 同 土器5出土状態（北東から）



1 2号方形周溝墓土器2出土状態（北東から）



2 土器2



3 2区全景（北西から）

京都市内遺跡発掘調査概報

平成9年度

発行日 平成10年3月31日
発行 京都市文化市民局
住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編集 京都都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL (075) 415-0521
印刷 真陽社